

## 平成20年度 地域貢献型学生プロジェクトモデル事例実績報告書

### 目 次

- 能登半島地震被災地域における歴史史料の調査  
（日本史研究会：金沢学院大学） . . . . . 1
  
- 学生の農村伝統行事参加による地域活性化の検討  
（学生援農隊あぐり：石川県立大学） . . . . . 3
  
- 地域に即した国際交流・多文化共生のプランニング提案  
（地域創造学類地域プランニングコース：金沢大学） . . . . . 7
  
- 珠洲市日置地区の集落での体験型民泊生活を通して、学生の  
視点で地域資源を発信するー地域メディア・コンテンツー  
（澤ゼミナール：金沢星稜大学経済学部） . . . . . 11
  
- 白山の魅力を交流体験  
（地域交流研究会：金城大学・金城大学短期大学部） . . . . . 15
  
- 特色ある「白峰方言」の伝承と普及活動による地域づくり  
（金沢大学教育学部加藤和夫研究室） . . . . . 19
  
- 白山の魅力発見・創造プロジェクト  
ーおろしうどんのイメージアップ作戦ー  
（白山の魅力発見・創造チーム：金城大学短期大学部） . . . . . 23
  
- 重要伝統的建造物群指定に向けて、古民家再生による地域おこし  
（金沢工業大学谷研究室） . . . . . 27
  
- 地域住民と協働した廃校校舎の学び舎プロジェクト  
（池田ゼミナール：金沢星稜大学経済学部） . . . . . 31
  
- 輪島市金蔵における金蔵万燈会と金蔵産コシヒカリのブランド戦略  
（知的財産法ゼミ：金沢大学法学部） . . . . . 35

## 能登半島地震被災地域における歴史史料の調査

学生団体名：日本史研究会（金沢学院大学）

参加学生：米田尚史、田中文敏、西村直亮、橋本裕太郎、山本洋平、笠谷沙希、鎌田康平、  
佐藤綾香、寺口学、長越仁志、山内美里、上牧奈津実

### 1. 地域活動の概要

昨年度に引き続き、穴水町教育委員会の依頼を受け、天領大庄屋中橋家に伝来した古文書の調査・整理に当たった。昨年度は冊子約 200 点、一紙約 200 点の表題を取って袋詰めを終えたが、今年度は、さらに約 700 点の整理を終え、昨年度と合わせて約 1,100 点の整理を終えた。また、中橋家とその周辺地域の視察も行い、穴水町教育委員会の方から現地で説明を受けた。さらに、古文書の読み込みによって、同家が、幕末期、松前交易で、七尾蕨を松前に移出し、鯡などの肥料を買い付けて収益を上げるとともに、佐渡鉱山の精錬に使用する木炭を能登から移出していたことなどが明らかになってきた。まだ未整理の文書が千数百点あり、来年度引き続き調査・整理を行い、古文書目録編集の基礎を固める予定である。なお、現地までの往返は、大学のバス及び自家用車を利用した。

### 2. 地域活動の具体的な内容

- ①活動の目的 震災後の文化財の保存に、日頃の勉強の成果をもって貢献する。
- ②実施日時 2008 年 9 月 21 日（日）・22 日（月）、2009 年 2 月 7 日（土）・2 月 8 日（日）、14 日（土）・15 日（日）の 3 回のべ 6 日実施した。
- ③実施内容 古文書を資料館からのとふれあい文化センターの研修室に搬出し、そこで古文書を開いて古文書一点一点の内容を確認し、それにふさわしい表題をつけて、整理用封筒に年月日・表題・差し出し・宛所を記載した。整理用封筒は、穴水町教育委員会で準備してもらった。また、現地調査を行った。
- ④参加者数 作業内容が一般的には高度の専門知識を要すること、旧蔵者のご都合をおもんばかったこと、などから地域の方で関係されたのは、穴水町教育委員会事務局岡本伊佐夫さんのみであった。参加した学生は 12 人、6 日間の延べ人数は 46 人であった。
- ⑤学生の実施した活動・役割 ③記載の活動が中心であるが、震災後の人手不足に陥っている穴水町に、古文書に関する一定の専門知識をもつ学生が、古文書整理の地域貢献を行い、古文書整理を進捗させた。
- ⑥地域住民の活動 古文書の搬出などの手配や移送活動を行い、学生たちに現地で地理などに関する説明を行った。
- ⑦役割分担 古文書の搬送、整理会場の設営、古文書整理はすべて共同で行い、個々の古文書から得られた情報を共有しながら作業を進めた。判読困難な文字は教員が指導した。その他、食事の準備や片づけなどもすべて共同作業で行った。

### 3. 地域活動の評価

①学生の意見 時間その他の制約が大きい中で、震災の中で出てきた中橋家文書の整理を大幅に進めることができて満足である。中橋家は穴水きっての資産家であったが、その資産が形成されていく過程を明らかにする基礎条件を整えつつあり、地域史の深化発展に貢献できることはうれしいことである。

②地域の意見 穴水町教育委員会事務局岡本伊佐夫氏談 学生の古文書整理の活動は、大変助かる。震災後、被害を受けた文化財の修復作業を進めることに多くの人手と資金がかかっている中で、学生諸君が熱心に古文書整理に当たって下さり、大変ありがたいと思っている。

### 4. 今後、この地域活動を継続、活発していくために必要なもの、及び課題

①学生の意見 今年度は、計3回の調査を実施した。この調査の過程で、地域に貢献すること、学ぶことは多く、来年度も同様に調査を進めていきたいが、資金的に若干不足を感じている。1回当たり10人が参加し、三回調査ができるだけの資金を確保することが課題である。

②地域の意見 金沢から遠隔の穴水に学生が来て作業をするためには、宿泊費の確保が必要であるが、町の財政状況ではそれが困難であり、その点で学生が動きやすい条件を整備することが今後の課題である。古文書の搬送や、封筒・文房具の準備、会場使用の便宜など、町で協力できるところは可能な限り努めたい。

### 5. その他（学生や地域の方の感想など）

学生の感想 自分たちが日頃勉強している日本史や古文書の知識を活かして、地域に貢献できることはうれしいことである。わからない文字や用語が多く、また、古文書の表題を付けることも難しいが、一点の古文書から地域の歴史が具体的に判明する醍醐味は、何ともいえずおもしろい。

## 学生の農村伝統行事参加による地域活性化の検討

学生団体名：学生援農隊 あぐり （石川県立大学）

参加学生：中村文美・中澤英美・志摩優介・市川広幸・尾崎真吾・木村公迪 他 14 名

### 0. 概要

七尾市中島町では多くの農村伝統行事が今も継承されているが、一方で過疎化による人手不足で衰退が進んでいる。地域ではこれまでその対策として都市農村交流活動による伝統行事振興を試みてきたが、規模の拡大とリピーター確保が課題であった。今回はこれに学生が参加し伝統行事の継承を助ける。その際、地域貢献に関心のある学生以外の多くの学生にも参加してもらい、継続的な活動の拡大には何が必要かということについて考える。

### 1. 経緯

「学生援農隊 あぐり」は、農業の振興と農村の活性化を目的として、地域貢献活動を行うサークルである。大学コンソーシアム石川の本事業を知り、その対象地域として、「西岸壮年団協議会（後に「どぼんこ・さるたひこ地域協議会」に改名）」による提案課題「七尾市内の農山漁村における民俗行事の継承とグリーンツーリズム」への参加を申請し、採択されたのが今回の活動のきっかけである。



### 2. 目的

七尾市中島町の伝統行事を振興させるため、当サークルは行事に参加し、人手不足を補う。参加者にはモニターとなってもらい、活動の継続には何が必要か意見を集め、それを明らかにする。その際、地域貢献に関心の高い当サークルメンバー以外の参加者も（大学から）募集し、意見の一般性を高める。

### 3. 目標

サークルでは、これまでの援農活動の取り組みから、こういった活動への参加者は地域貢献に興味のあるごく一部の人に限られていると認識しており、今回の活動で多くの参加者を募集するには地域貢献活動以外の要素を取り入れることが必要になると予想された。一方、地域ではこれまでの都市農村交流の取り組みから、参加者に継続した参加をしてもらうことが課題であった。そこで、活動を通して「参加を楽しんでもらう」だけでなく、「伝統行事を好きになってもらう」、「地域に親しみを感じてもらう」ことが、参加者と地域とのつながりを強化し、再訪を促すことになるのではないかと考えた。

以上のことから、サークルの働きかけ次第で実現できることとして、今回は①多くの参加者を集めること、②参加者にまた来たいと思わせること、を目標とした。もちろん活動の継続は大前提である。

### 4. 目標達成の方法

#### ①多くの参加者を集める

観光地巡りで旅行気分を演出する、参加費を安くする、男女の恋愛感情を利用するなど、学生の経済状況や嗜好を考慮した誘因を考える。

②参加者にまた来たいと思わせる

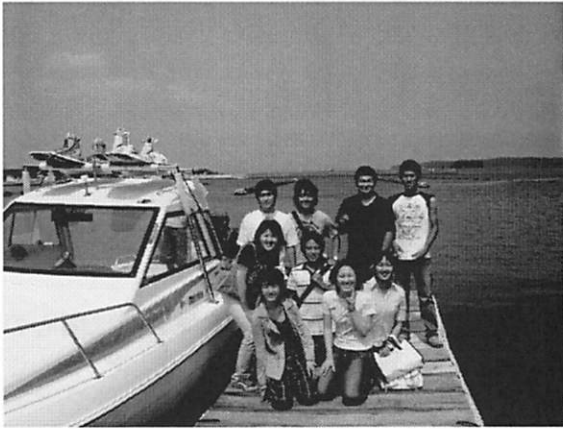
娯楽要素をなるべくたくさん取り入れた計画を立て、その通りに進捗させる。つまり参加者を落胆させないよう努める。

5. 活動の結果

(1) 伝統行事参加の様子

表 1. 行事・調査の実施日と参加人数

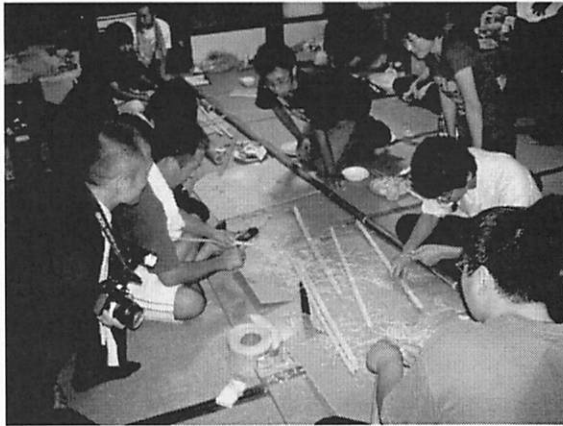
| 実施日            | 分類 | 人数   | 内容（括弧内は集落名）        |
|----------------|----|------|--------------------|
| 2008/ 7/ 5(土)  | 行事 | 9 名  | 虫送り（鳥越）…豊作祈願の行事    |
| 2008/ 8/30(土)  | 行事 | 5 名  | ドボンコ作り（小牧）…祭り道具の修理 |
| 2008/ 9/20(土)  | 行事 | 12 名 | お熊甲祭（小牧）…杵旗祭り      |
| 2008/ 9/23(祝火) | 行事 | 3 名  | 新宮祭（鳥越）…杵旗祭り       |
| 2008/ 1/26(月)  | 調査 |      | 学生参加者アンケート調査       |



虫送り



お熊甲祭



ドボンコ作り



新宮祭

(2) 新聞掲載

今回の取り組みは新聞に数回掲載され、地域への注目が高まった。

(3) 学生参加者アンケートの結果 回収率 90% (17/19 人)

以下、回答の多かった選択肢を挙げる。

①参加のきっかけ (複数選択)

伝統行事に魅力、能登の観光をしたかった、参加費用が安かった  
友達に誘われた、地域貢献に関心があった

②参加後、特に良かったと感じたこと (複数選択)

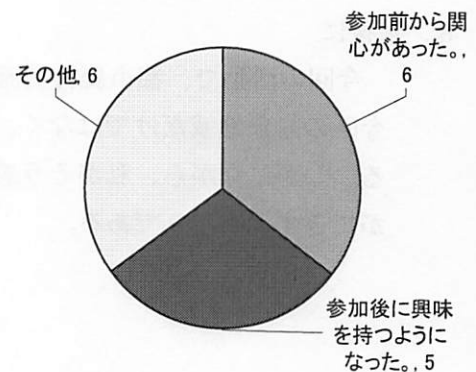
伝統行事、地域住民との交流、友達と遊んだこと、  
地域住民のもてなし(レジャー体験)、観光

③参加後の印象 (複数選択)

90%が「楽しかったので参加してよかった」を選択  
60%が「また来てもいいなと思った」を選択  
40%が「能登・中島町のことが好きになった」を選択

④参加しても良いと思える金額 (選択)

学生には 3000~7000 円が参加応募の目安



## 6. 考察

参加者の多くが、今回の(伝統行事)参加について楽しかったと満足した。参加によって、地域にまた訪れたい、地域に愛着を持った、と感じた人が多くいた。こういった都市農村交流を継続して行うことが、農村地域への来訪者数増加につながり、農村地域における観光が振興されることによる地域活性化が期待できるのではないかと考えられる。

行事参加前後で参加者の「地域貢献や活性化に対する興味関心」がどのように変化したかを知るため、質問「参加のきっかけ」で回答「地域貢献に関心があったから」を選択した者を「参加前から関心があった者」とし、これ以外かつ質問「参加後の印象」で回答「地域貢献や活性化に興味を持った」を選択した者を「参加後に興味を持つようになった者」、それ以外を「その他」とした。単位は重複を修正し実際の人数で示した。(図 g5) 図 g5. 活動参加前後での参加者の「地域貢献への関心」の変化 (単位: 人) 参加前、地域貢献や活性化に対して関心があったのは 35% (6/17) と少なかったが、参加後には、関心のある人 65% (11/17) の方がその他 35% (6/17) を上回った。このことから、地域貢献活動に参加することが、地域貢献への興味・関心を持つきっかけとなるといえる。また、地域貢献への関心が地域貢献活動参加へのきっかけにもなることから、今後こういった活動を広めていく上では、『多くの関心がない人々にまず地域貢献活動へと参加してもらう』こと、そのための『魅力的な宣伝方法や、日程の企画』が重要と考えられる。

なお、このことから、今回参加者募集の際に狙った「地域貢献への関心が高い学生だけでなく、一般の学生からの応募」が得られたと判断できる。

## 7. 提言

取りも直さず参加者に最も望まれるのは、来年度も参加を継続することであるのは言うまでもない。そこで気を配らなければならないのは次のことである。

私(中村)はこの報告の執筆者であると同時にこの活動の計画担当者であるので、とりわけ担当者の引き継ぎをきっちりと行うことが必要であると痛感している。より正確には、このような都市農村交流に参加するという積極的な意志が引き継がなければならない。引き継ぎが不十分

であることは、即、活動の継続が困難になることを意味するので、現実には直面する可能性がある切実な問題である。したがって、最善であるのは年を経るごとに活動が発展していくことなのだが、今回のように地域住民と参加者双方の満足が得られるような活動の企画・運営は、担当者が引き継がれていったとしても、同じ水準を保持することが次善となるし、私はそれを本意ではないにしろ期待せざるを得ない。

#### 8. 最後に

今回の活動で、都市農村交流はこれから大いに発展する可能性があると感じた。それも、今回の対象地域だけではなく、他の農村地域にも適応できるような普遍性をもった可能性をである。しかしながら、私がそう感じたことやその理由などの詳細を全てこの紙面で十分伝えることができず、心残りである。

## 地域に即した国際交流・多文化共生のプランニング提案

学生団体名：地域創造学類地域プランニングコース（金沢大学）

参加学生：仁谷沙耶香・神田康平・小林知美・前川洋輝

### 1. 地域活動の概要

金沢大学地域創造学類地域プランニングコースの学生が、夏休みに加賀市の多文化共生 NPO 法人「たぶんかネット加賀」の活動に参加し、学生の視点から「地域に即した国際交流・多文化共生のプランニング提案」を行うことを目的とした。加賀市において地域に即した国際交流・多文化共生を推進するためには、地域の現状を把握することが必要であるため、NPO の事務所がある蘇梁館だけでなく加賀市内のいくつかの事業所や周辺市町村の事業所での多文化共生の取り組みの現状を学ぶために NPO 職員とともにヒアリング調査を行い、ワークショップ形式でヒアリング結果を整理した。そして最後に提言としてまとめ、加賀市役所において市役所職員や市長を前にして提案を行った。

### 2. 地域活動の具体的な内容

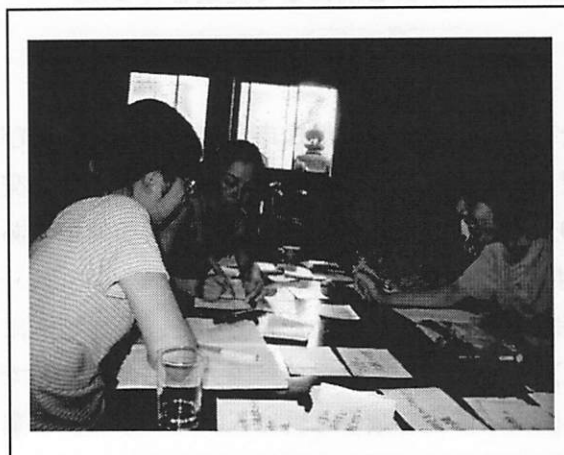
まず、8月20日（水）に多文化共生施策の先進事例を視察するために、浜松市国際交流協会およびブラジル人学校（エスコラ・ブラジル）を視察した。翌21日（木）は、静岡市役所と静岡市国際交流協会でのヒアリング調査を行った。8月31日（日）～9月10日（水）の期間は連日加賀市熊坂にある蘇梁館を拠点として活動を行った。8月31日にはまず、小松市国際交流協会でのヒアリングを行い、その後加賀市立図書館で「加賀市外国人のための日本語教室」の講演を聞いた。その後、橋立地区におけるまちづくり活動の様子を視察した。9月1日（月）は、大聖寺警察署で外国人が増えることで犯罪が増加しているか否かをヒアリングし、午後には外国人研修生を数多く受け入れている OS 事業協同組合北陸支部でのヒアリングを行った。9月2日（火）は、午前中に前日のヒアリングのまとめを行い、午後には加賀市役所のまちづくり課、教育委員会、母子保健課、社会福祉協議会、町屋再生室、まちづくり課で自治体による多文化共生への取り組みについてヒアリング調査を行った。9月3日（水）は石川県観光交流局国際交流課において県としての多文化共生への取り組みについてヒアリング調査を行った。9月4日（木）は、蘇梁館で前日までのヒアリング結果を整理する作業を行った。9月5日（金）は、ヒアリングを整理した結果をもとにしてワークショップ形式で、加賀市の多文化共生施策の問題点を洗い出す作業を行うとともに、指導教員と活動の進め方について意見交換を行った。土曜日と日曜日は休みの予定であったが、偶然にも野々市町で「いしかわ国際交流フェスティバル」が開催されていたので、一部の学生はそれにも見学に出かけた。9月8日（月）、10日（火）、11日（水）は終日提案書の作成に充て、鄭元書とプレゼン用の PPT を完成させた。9月18日（木）は、午前中に蘇梁館に集合してプレゼンの準備を行い、午後には加賀市役所で市役所職員を前にして加賀市の実情に根差した多文化共生施策の提案を行った。



浜松市にあるブラジル人学校「エスコラ・ブラジル」でのヒアリング  
2009年8月20日（水）



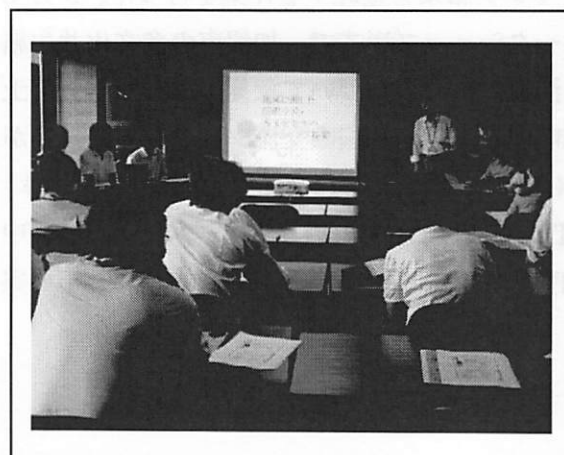
エスコラ・ブラジルの校舎から下校の途につく学生たち  
2009年8月20日（水）



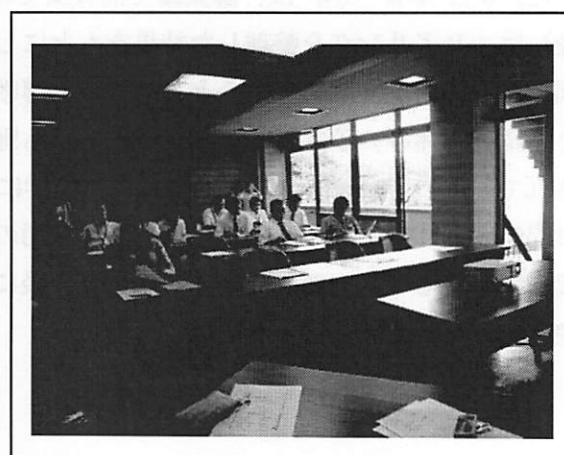
ワークショップを通じて加賀市における多文化共生の問題点を探る学生  
2009年9月5日（金）



たぶんかネット加賀メンバーの福永先生が学生を激励するため登場  
2009年9月5日（金）



市長から厳しい質問の矢が学生に向けられる  
2009年9月18日（木）



多くの職員が学生によるプロジェクト提案に耳を傾ける  
2009年9月18日（木）

### 3. 地域活動の評価

昨年度に引き続き、2年目の学生の派遣だったため、全般的にかなり順調に活動を進めることができた。大学側も、NPOのメンバーや学生とともに浜松市や静岡市にヒアリング調査に出かけることで、事前学習を手厚くする努力を行った。こうしたことも、今年度に活動がスムーズにいった理由の一つとして挙げられるだろう。地域と連携した活動を継続することでお互いの信頼関係が深まり、地域社会に学生を派遣することによって得られる教育的な効果が高まり、また地域と大学との交流も深まり、それが地域における活動を活性化させる大きな要素となりえることを実感させられた。

### 4. 今後、この地域活動を継続、活発化していくために必要なこと、及び課題

受け入れ先のNPOの活動そのものが不安定である。来年度もぜひとも学生を派遣したいと考えているが、多文化共生の理念が加賀市を始めとする石川県など北陸地方に広く受け入れられているとはいえない状況にある。石川県の施策における位置づけを見ても、他の都道府県に比べるとその優先順位はかなり低い。そのため、この地域活動を計測・活性化するためには、県全体・北陸地方全体の行政・地域社会の認識を変えていく必要がある。大学生を多文化共生NPOに派遣する事業だけでは、こうした大転換を成し遂げるのはかなり困難である。

加賀市役所で学生がプレゼンを行った際にも、かなりの外れなコメントが提示され、対応に苦慮した。

### 5. その他

#### <学生の評価>

- ・「学ぶ」、「知る」ということの重要性を知ることができた。ある程度の知識がなければよい結果は得られないし、知識を得るために、常に関心を持って学ぼうとしなければならないということを学んだ。
- ・目的意識を持って物事を行うことの大切さを学んだ。
- ・たくさんの情報を整理する術—ワークショップを体験し、物事を関連付ける方法を覚えることができた。
- ・人から話を聞くことや、人に自分の考えを伝えることの難しさを知った。
- ・市役所やNPOの仕事や活動がどのようなものか、肌で感じることができた。
- ・地域や社会のためになる仕事にやりがいを感じた。
- ・地域のために、ボランティアなどで多方面に活躍されている方がたくさんいらっしゃるということがわかった。
- ・地元のことはよく知っていると思っていたが、まだまだ知らないことが多いことに気づいた。
- ・地元のよさを再発見できた。
- ・普段の大学生活では絶対に得られない体験ができた
- ・大学在学中に、地域社会に出ていろいろな活動をし、視野を広くすることがとても大切だと思った。
- ・様々な方面で活躍されている、たくさんの方と交流する機会を持つことができた。
- ・地域や社会のために活動されている方は素敵で輝いていて、非常に刺激になった。
- ・人と人とのふれあいはとても大事だと思った。
- ・自分の将来を考えるいい機会になった。
- ・一緒に参加した学生と、グループワークで楽しく活動できた。

- ・現場で一生懸命に活動に取り組んでいる方々と一緒に活動ができたこと。
- ・実際に現場に出かけて地域での問題を考える機会が得られたこと。
- ・今まで知識としてしか知らなかったことを実際に現場で見聞きし、実感し、そこから自分に何ができるかを考えさせられた。この体験は、学校の授業だけでは得られない基調なものである。
- ・現実の社会でのさまざまな問題点について考えることができた

#### <地域の評価>

##### [よかった点]

- ・学生の受け入れマニュアルを作ったことで、実際に学生を受け入れる前に自分自身で学生と共同の活動をシュミレーションすることができ、受入期間中にも作業のチェックや軌道修正などに役立った。
- ・昨年の反省より、受け入れの学生を1人ではなく4人に増やし、共同で提案してもらう形式にした。主体的に動いてくれる学生たちに恵まれたせいかもしれないが、彼らの間で作業が進み、受入側は作業を客観的に見られる余裕があった。その隣で、受入側は通常の業務を行うことができた。
- ・期待したとおりプランニングには、学生、若者ならではのアイデアが盛り込まれていた。その中で、加賀市に多い外国人研修生と、学生の接点が新たに見つかった。「若者」「よそ者」＋「ある一定期間そこにいる者」。プランニング提案にその視点が盛り込まれていた。
- ・行政や他機関への聞き取り調査に同行する機会に恵まれ、「たぶんかネット加賀」としても、広く多くの活動や見解を知ることができた。(金沢大学側の知識＋ネットワークを利用させていただきました。)
- ・大学側との関係が一層密になり、石川県全体のネットワークにも今後と発展しそうな予感もある。

##### [困ったこと、残念だったこと]

- ・学生たちの市役所での報告発表会に、事情をわからない人から、見当違いな発言が出たこと。いいほうに思えば、学生たちの提案を本気で聞いてくれていた証とも取れるので、肯定的にとらえたい。多文化共生に関する加賀市の一般的なスタンスが身にしみてわかった。
- ・せっかく知り合えた学生たちと、短い期間の受入で終わったこと。(今後も何かつながることが持てたらいいと思います。)

## 珠洲市日置地区の集落での体験型民泊生活を通して、学生の 視点で地域資源を発信する—地域メディア・コンテンツ—

学生団体名：澤ゼミナール（金沢星稜大学 経済学部）

参加学生：小堀 貴志・松尾 太市・平嶋 聖子・林 加菜恵・中村 雄哉・堂野 彩  
他 12 名

### 1. 地域活動の概要

平成19年、珠洲市全域にケーブルTVの視聴が可能となるICTインフラの整備が完了し、現在100%の世帯加入を目指して普及活動につとめている。

そこで、われわれはこのICTインフラの有効活用の一対策として、視聴者（市民）参加型のケーブルTV事業モデルであるパブリック・アクセス・チャンネル（PAC）の創設を考えた。

PAC事業として先進的に取り組んでいる事例は、わが国ではまだ少なく、鳥取県米子市周辺をネットワークでむすんでいる中海ケーブルと中海インターネットの取り組みがもっとも進んでいるといえる。この事例にみられる特徴は、地域住民・企業・教育機関・公的機関・医療機関など住民生活に必要なあらゆる要素を取り込んで運営する協議会を立ち上げていることである。

今回のわれわれのプロジェクトは、地域住民総参画型のICTインフラ活用の確立のために、まず第一に住民のケーブルTV放送に対する意識の変化が必要であると考え、住民自らが参画したくなるようなメディア・コンテンツを「よそ者・若者」の目線で映像を制作し、一定期間ケーブルTVで放送した。

その結果をアンケート調査し、今後のケーブルTV運営や番組制作に反映するための提案書にまとめ、年度内に事業者と意見交換会を開催する。

### 2. 地域活動の具体的な内容

撮影機材は、一般家庭用として普及しているビデオ・カメラを使用して、特に撮影の技術的な指導や対象に関する事前学習を行わないで、先入観をもつことなく現場で感じたままの直観的な撮影活動を徹底した。（ユビキタス・メディア・コンテンツ実験）

#### ① 10月3日～5日 珠洲市狼煙町での農家民宿での宿泊体験

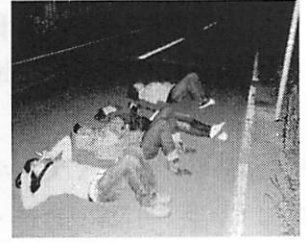
珠洲市における地域雇用創造推進事業（新パッケージ事業）の一環として農家民宿経営を目指す珠洲市住民のモニターとして学生7名と2泊3日の宿泊体験と地域資源の調査・研究を行った。

- ・集落内取材
- ・「岬自然遊歩道歩こう会」参加取材
- ・川浦町「キリコ祭り」キリコ担ぎ体験取材
- ・伝統漁法「タコすかし」体験取材



北國新聞、平成 20 年 10 月 5 日朝刊掲載

北陸中日新聞、平成 20 年 10 月 5 日朝刊掲載



② 11月8日 折戸町木の浦「徳保の千本椿」群生地でのヤブ椿の間伐

珠洲市日置地区折戸町木の浦地内に群生するヤブ樺の間伐を地域住民（奥能登岬みちづくり協議会）と協働し、里山の環境保全に資する活動を通して、学生の環境意識の向上と里山の地元住民の生活資源に対する深い思いを体感した。伐採した樺をそのまま放置するのではなく、資源として有効活用できないか実証するために、備長炭に匹敵する硬度があるとされる樺炭を製作し、樺の炭琴として加工する計画を立案した。（珠洲ブランド商品化実験）

③ 11月16日 「お茶炭の森づくり運動」 参加取材

珠洲市唐笠町地内の山林で、お茶炭に使用されるクヌギやナラの植林を行う。この活動は、貴重な里山の保全と資源の持続的な確保を目指した新たな試みである。

# お茶炭の森づくり運動

～地場産業の創出と里山保全におかって～

**● 事業趣旨** 茶田川流域の茶産地を1981年、5年前から進めてきたウスキの植林を、茶田に  
関わられている方や関係機関・団体のあそび方、また、地域振興に意欲的な方  
など、様々な方と連携していただき、日本の森づくり「森通」といって伝統文化の  
継承による持続可能な里山の創出と、里山を守るとのつながりについて所感を交えて  
いただけたら幸いです。

**● 日 時** 平成22年11月10日(日)：午前10時～午後2時(少雨決行)

**● 場 所** 茨城県市営宮崎の9号地  
集合場所：うすホルミナ趾界隈(取手市鹿田町)  
集合時間：午前10時

**● 内 容** ウスキの植林：植があらかじめ立ててあるので、その植え置きです  
終結地：(6年経)取手、茨城不工組見学

**● 参加費** 500円

**● 参加費** 500円(昼食代として) 当日の口・酒・おぐさなど、

**● 持ち物** 雨具、長靴、手袋、お弁当、タオル、その他必要と思われるもの  
※ウツは自分で準備いたします。

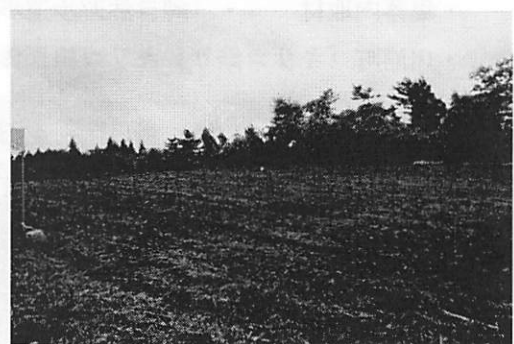
**● 申込方法** 裏面の申込書に必要事項をご記入の上、FAXまたはメールにて申込ください。

**● 募集締切** 平成22年11月10日(月)

**お茶炭とは？**

茶葉で包みこんだウスキやウツの  
木炭で、ウツが母の森と  
お茶炭とも呼ばれ、ウツ  
「茶炭」とも呼ばれます。

**お申し込み合わせ・申込先は**  
大野製炭工場  
茨城県市山手町小一-2  
TEL: 0768-96-2010  
FAX: 0768-96 2040  
E-mail: ocf-e184p1@naha.jp



## 植林活動に参加

## ④ 1月10日 「椿炭の窯出し」体験取材 東山中町大野製炭工場

11月8日に珠洲市日置地区折戸町木の浦地内に群生するヤブ椿の間伐を地域住民(奥能登岬みちづくり協議会)と協働し、伐採した椿をそのまま放置するのではなく、資源として有効活用でき

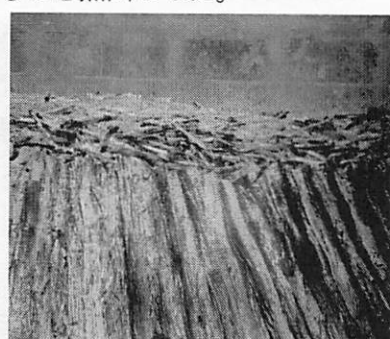
ないか実証するために、大野製炭工場において椿炭に製炭したものを窯出しした。



大野長一郎さんの指導の下



椿の木の窯入れ



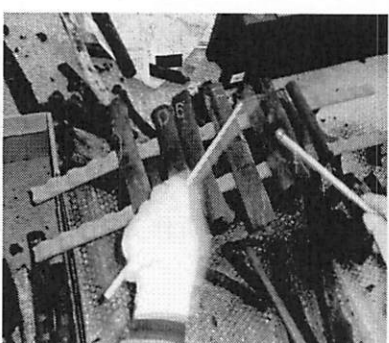
焼き上がりと窯出し

⑤ 2月27日 炭琴製作の体験取材（金沢星稜大学内）

マリンバ奏者 山口公子氏（プロ・兵庫県尼崎市在住）の指導のもと、製炭した椿で炭琴を制作する。



炭琴の音づくり



音階ができました



曲目の演奏

⑥ 3月22日 珠洲市折戸町木の浦「すず椿フェスティバル」での椿の炭琴演奏会

### 3. 地域活動の評価

本プロジェクトは、3月22日に珠洲市折戸町木の浦で開催される「すず椿フェスティバル」で地域の保育園児や児童を対象に、椿の炭琴づくり体験と演奏会の事業をもって終了するものであるが、現段階での成果に関して評価する。

別添プレゼンテーション資料『地域メディア・コンテンツ～珠洲市 狼煙町から情報発信～』で総括しているように、「放送番組の映像作品は、プロでなければできないという思い込みを消し去る」というわれわれの当初の目的は、概ね達成されたと考えられる。それは、2月2日～8日にかけて珠洲市ケーブルテレビを通して放送されたわれわれの映像作品に関して寄せられた次のアンケート結果からうかがえる。

【設問3. このような作品を自局の自主放送枠で放映すること（パブリック・アクセス・チャンネル）について、どのようにお考えですか？】

住民自身が番組の企画・制作を手がけ、住民の身近な話題を積極的にケーブルテレビで放送することができるようになることで、地域や生活などについて共通の問題意識をもち、広く議論する場が創出されることにもなる。また、学校に通う生徒などが番組制作に参加出来るような環境が整えば、メディアを理解し活用する能力や、情報を創り出し発信する能力を養うことができるなど、メディアリテラシーの向上を図ることができるように考えている。

【設問4. 澤ゼミ学生に番組制作上のアドバイスなどがあれば記入ください。】

番組を拝見し、皆さんの積極的な活動に敬意を表するとともに、その地域における貴重な経験は、

自身の視野が広がり、地域を知る最良の経験であると思います。番組の制作に対する技術より、体験を通して感じたことをストレートに伝えることが大切であり、今回の作品は、非常に良く伝わってきて、美しく見ることができました。地元の人を中心にその活動を紹介することで、よりわかりやすい番組になっていると思います。今度は、歴史的な生活背景から生まれた能登の風俗（例えばキリコの成立ち、アエノコトなどの特徴のある風俗など）についての番組作りを行って下さい。全面的に協力します。

#### 【設問 5. その他】

ケーブルテレビで地域や生活、行政などに関する話題を取り上げることにより、住民が共通の意識をもち、地域に対する参加のきっかけを生み出すことになる。その結果、これまでは行政任せであった事柄についても自分自身の問題として捉えていくことになり、住民の自立や地域活動・行政への積極的な参加を促すことができれば、ICTインフラは、さらに有効な通信手段となる。

今回のわれわれのこうした実験的な試みが、市民のこれまでのメディアに対する意識に変化をもたらす契機になり、珠洲市民のICTインフラの積極的な活用へ波及し、住民主導型のICTインフラ運営協議会のような組織が立ち上がることが期待される。こうした地域メディア・コンテンツの充実化は、既存の地上波テレビではできない、地域密着型のケーブルテレビならではの事業であると考えられる。

※「大学生へのアンケート」は、現在、集計解析作業中につき本報告書ではアンケートから得られた概要を反映するにとどめた。

#### 4. 今後の課題

われわれが大学コンソーシアム石川から与えられた予算で、多人数の宿泊をとまなう調査取材活動を実施するにはかなり計画を限定的にするしかなかった。しかし、実際には当初の計画を上回る支出が現実におこり、かなり経費のやりくりで苦慮していた際、珠洲市に相談を持ちかけたところ、珠洲市が今年度推進していた地域雇用創造推進事業（新パッケージ事業）の一環として、農家民宿経営を目指す珠洲市住民（大坪久美子さん）の紹介を受けた。

今回のプロジェクトが内容豊富になったのも、モニターとして宿を提供してくださった大坪久美子さん、椿の切り出しから運搬を担ってくださった茅山一男さん、椿の炭を作ってくださった大野長一郎さん、珠洲市職員のご協力があつたから最後までやり遂げることができました。ここに深く感謝申し上げます。

最後に、モニターとして宿泊受け入れをしてくださった大久保久美子さんが、その後次年度から新たな農家民宿として起業することになったという朗報を耳にし、われわれが起業家発掘の一助になったという喜びを共有し、これからの発展を祈念します。

#### 5. その他（参加学生の感想）

実は、私は珠洲市に行くのは今回が初めてでした。行ってみて思ったことが、珠洲市の人々は自然と共存しているのだ、ということです。狼煙町には夜遅くまで営業している居酒屋も24時間営業のコンビニもありません。日が昇ると共に、起きて活動し、日が沈むと家に帰ります。食事も、その日に釣れた新鮮な魚や自分の畑で採れた野菜を使います。とても、驚いたと共に「これが本当に人間のあるべき姿なのかもしれない」という思いも生まれました。みなさんもぜひ、珠洲市に行って、農家民宿を体験してみてください。このプロジェクトで私たちが制作した番組が珠洲市に興味を持つきっかけになれば、嬉しく思います。（澤ゼミナール3年 林 加菜恵）

## 白山の魅力を交流体験

学生団体名：地域交流研究会 金城大学・金城大学短期大学部

参加学生：端虎彦 宮澤和典 長森晴香 南智恵 志治バネッサ君江 他、合計 15 名

### 1 地域活動の概要

白山市、財団法人地域振興研究所が主催する「まるごと白山ファンクラブ」の会員とともに、イベントへ参加し、域内交流を通して、地域活性化を図る。今年度は2回のイベントに参加した。

会員と交流しながら、白山市の魅力を学習し、若者の視点から、クラブのイベント運営への協力、創意工夫などを行っていくことを目的にし、その中で参与観察的な調査研究を行ってきた。

最終的には、白山市、地域振興研究所などの協力を得て、「金城生が考える白山 B 級（？）グルメマップ」の作製に取り掛かった。

### 2 地域活動の具体的な内容

#### ■イベント参加；1回目

##### 白山ファンクラブ

##### 第3回 三方岩トレッキングで高山植物観察と胃腸の湯中宮温泉

日 時 平成20年7月5日（土）午前8時30分～午後2時

場 所 中宮温泉とその周辺

参加者 10名

内 容 白山スーパー林道内にある三方岩岳を登り自然解説員の案内を受けながら高山植物を観察し、山頂でお弁当を楽しんだ後、姥ヶ滝、親谷の湯、中宮温泉を楽しむ。

7月のイベントにサークルとして初めて参加した。我々以外のファンクラブの一般の会員の参加は2名と少なかったが、スタッフや地元のガイドさんたちと1日楽しめた。

午前中は、白山スーパー林道内の駐車場に車を止め、通常なら片道約1時間程度のトレッキング。



自然観察員同行のトレッキング



三方岩

トレッキング中、自然観察員の方が植物の解説をくわえてくれた。のぼりは約 1.5 時間かかった。

これまではあまり身近に感じたことのなかった高山植物等の特性を知る機会でもあり、素直に面白かった。また整備を終えたばかりの三方岩のコースを体験し、普段であればただ通過するだけでかなりの金額を払うスーパー林道と思っていたが、いろいろなところに努力の跡があることを知ることができた。

山頂で、昼食を戴き、午後は、ふくべの大滝の見学をした後に、蛇谷園地の駐車場に車を止め、姥ヶ滝、親谷の湯、まで片道約 20 分の小トレッキング。駐車場からは急こう配の階段を下りて、姥ヶ滝を目指す。我々も普段の不摂生がたたって足がガクガクしていたが、高齢者の方でも健脚を披露していた。途中で本物の蛇と遭遇し、まさに蛇谷園地を実感しながら、蛇谷川からの湧き出す約 100 度の温泉にも驚く。帰りの急こう配登りでは、高齢者の心配をしながらも、対応策はあまり浮かばなかった。

中宮温泉で 1 日の汗を流し終了。ファンクラブ内での交流はほとんどできなかったが、地元住民やスタッフとの交流を通し、白山市で初めて観光している気分浸れた。



蛇谷園地の遊歩道



日本の滝 100 選「姥ヶ滝」

#### ■ イベント参加 ; 2 回目

##### 白山ファンクラブ

##### 第 4 回 吉野工芸の里フェスタと報恩講料理

日 時 平成 20 年 10 月 4 日 (土) 正午～午後 2 時 30 分

場 所 吉野工芸の里 アートアンドクラフト館

参加者 14 名

内 容 白山麓で昔から伝わる報恩講料理を各地域の食材を使って再現し、自然食としても注目される山麓の味覚を味わうとともに、吉野工芸の里フェスタものづくりフェアを楽しむ。

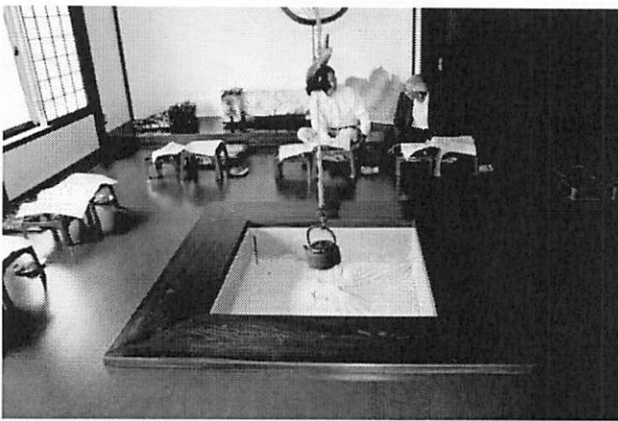
北陸、とくに山間部で生活をしている学生にとっては、わりと一般的なものであるが、平野部で住んでいる学生にとっては読み方さえ分からないのがこの報恩講料理 (ほおんこうりょうり)、通称「ほんこさま」である。名前を知っている学生でさえ、食べたことのない者がほとんどであり、また、その地方 (場所) によっても、そのメニューが違い、「地物」がキーワードになってくる。すべてに共通するものが親鸞聖人の好物だった小豆になる。

このイベントも、通常は年配の方が多いそうだが、今回は学生も多く参加し、主催者の一人であるレ

ストラン手取り側のご主人千菊さんの説明にも自然と力が入ったようである。それでもなくとも仕込みに1週間の時間をかけた料理であり、その手間は、コストを見ればおのずと想像できた。1人6000円、これがこの料理の値段である。

やはり年配の参加者が多く、学生との交流というところは難しい様子であったが、学生からの意見としては、高齢者といえどもあまり報恩講料理を食べたことが多くないのではないかとのことであった。1つ1つの料理を感激しながら食べている様子がうかがえた。学生の視点からすると、まだマクドナルドのほうが…という意見も聞かれなかったわけではないが、食べられない料理であることから考えると、「食わず嫌い」という側面があるのではないか。参加者の1人に日系ブラジル人一世の方が、ブラジルからちょうど日本滞在中であったため参加していたが、かなり感激されていたようであった。

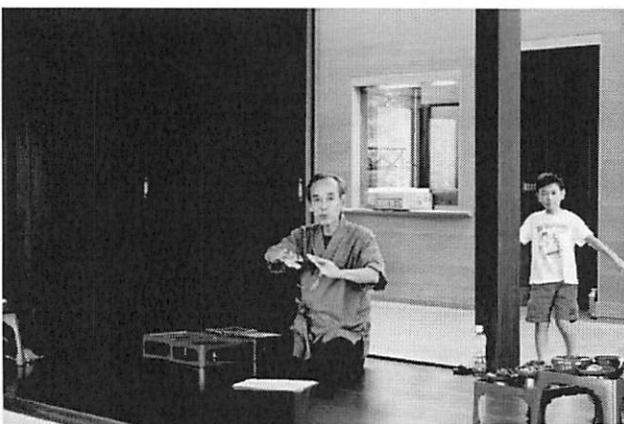
料理の解説にとどまらず、山麓の各家庭には、報恩講料理用の膳の食器が20人分はあるなど、地元の食文化の解説を受け、改めて食文化の深さにふれた機会となった。



吉野工芸の里 アートアンドクラフト館



準備風景



千菊裕二氏による報恩講料理の解説



報恩講料理

#### ■「金城生が考える白山B級(?) グルメマップ」の作製

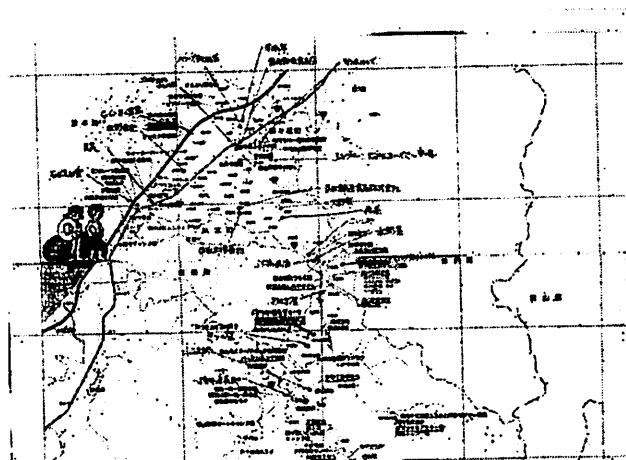
白山市役所観光企画課，財団法人地域振興研究所とコラボレートし，地域学生の視線から見た白山市のグルメマップを作成。当初は「B級グルメ」と銘打って始めた企画であるが、取材協力いただける店舗のイメージ等があるため、「B級」としていいものか検討中。

2回のイベント参加で出てきたことは、われわれ学生は、あまり周辺に遊びにもいかず、もしくは決まった遊びしかせず、食事も国道沿いのファミリーレストランで済ませており、大学のある地元のこ

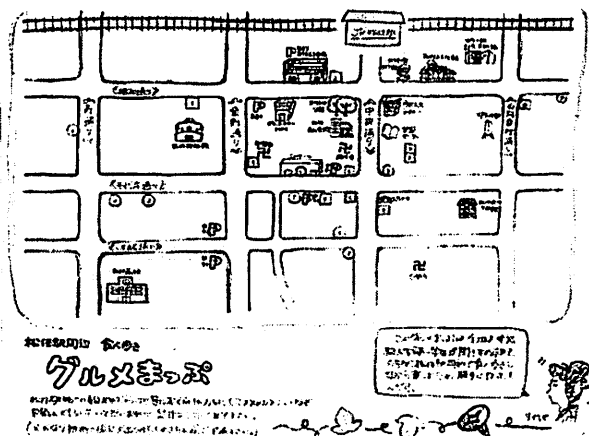
とを知らないということであった。また、ファンクラブのイベントに参加しても、主催者側との交流はあっても、ファンクラブ同士の交流は難しいことに気づいた。

そこで、白山市観光企画課さんの協力もあって、大学生の考える地元のグルメマップを作成し、それを外部に発信していこうということになった。

まずは、白山の地図にグルメ情報をプロットしたのだが、白山市はあまりにも広いため、大学に近い駅として松任駅を選択し、作業に取り掛かった。



白山市全体



松任界限マップ

### 3 今回の地域活動の評価

2回のイベント参加により、2年ないし4年間通っている白山市のことについて、全く学ぶ機会がないことに気づいた。また、地元に住んでいる人間ですら、家の周りのことしか知らず、海の人間は山のことを、山の人間は海のことを全く分かっていなかった。

最終的にグルメマップの作製に取り掛かり、白山市内を動きまわることによって、少しずつ地元のことが分かるようになってきた。とくに大人の方との会話が増え、地元のこぼれ話を聞く機会を得るようになってきた。

### 4 今後、この地域活動を継続、活発化していくために必要なもの、及び課題

想像以上に一般の方との交流というものは難しいということがわかった。ただ、学生という若さゆえ、いろいろかわいがってはもらえ、多少積極的に動けば情報を得ることにはできることもわかった。

情報の収集が終わったら今度は発信していく機会を探さなければならない。今回グルメマップの作製を通して、情報発信の仕方を考えていかなければならない。今回は「金城生の…」ということで作成したが、その情報の拡大と熟成を図り、広く発信していける手段を考えていく。

### 5 その他（学生や地域の方からの感想等）

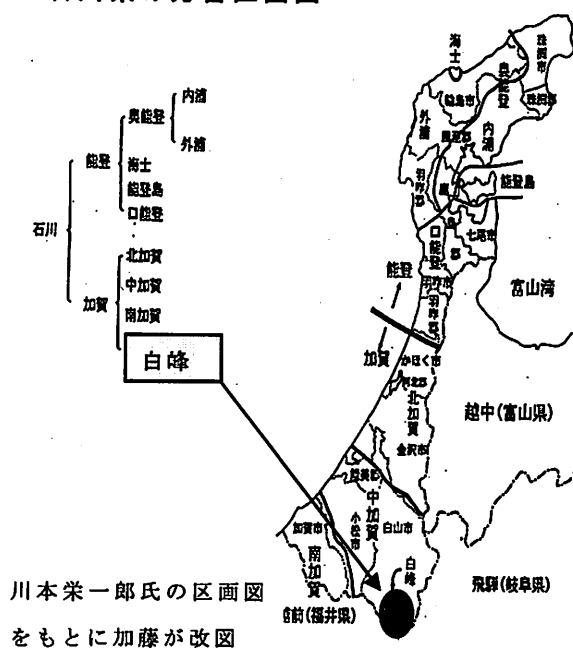
将来の遊ぶ手段を考える上でも、今回のイベント参加からは多くのことが学べた。また地域との交流が図れて、地域に生きる大学であることを改めて認識することができた。

## 特色ある「白峰方言」の伝承と普及活動による地域づくり

学生団体名：金沢大学教育学部加藤和夫研究室

参加学生：渡邊真，ノフィア・ハヤティ，辻香織，今澤ひろ子，大矢和泉，澤田彩，  
田中眞由美（以上加藤研究室）／協力：鍵主智美（経済学部西嶋研究室）

### 石川県の方言区画図



### 1. 地域活動の概要

石川県方言の中でも周囲の方言とは異なる特徴を多く持つことで、研究者に“言語島”として知られている白山市白峰地区（旧白峰村）の方言（左図参照）は、テレビに代表されるマスメディアや広域合併などの影響で、共通語化や加賀方言化が進み、急速に衰退しつつある。

私たちの活動は、白峰地区の生活を支えてきた生活文化としての方言を見直し、伝えていくために、白峰方言を様々な形で取り上げたイベント「白峰方言大会」を継続的に開催するとともに、「白峰方言検定」を実施するなど、方言を活用した地域づくりにつなげていくとするもの。

### 2. 地域活動の具体的な内容

#### ・ 9月29日（第1回打ち合わせ）

金沢大学で昨年度開催の「方言大会 2008」（2008.3.8）を振り返り、白峰雪だるまの里協議会の有志と今年度の方言イベントの内容を検討するとともに、来年度以降の「白峰方言検定」実施に向けて今年度のイベント中に「プレ方言検定」の実施を決める。今年度のイベント開催日を11月23日（方言感謝の日）に決定する。

#### ・ 10月4日（第2回打ち合わせ）

加藤研究室のゼミ合宿を兼ねて白峰に宿泊し、1日目に「おろしうどん」の方言名提案の参考とするために雪だるまカフェで「おろしうどん」を試食。夜には白峰雪だるまの里協議会の有志と11月のイベントについての打ち合わせをする。

#### ・ 11月10日（事前学習会）

イベント事前学習会を兼ねて、加藤教授が第4回雪だるまの里協議会で「白峰方言の魅力について」のテーマで話し、終了後イベントの内容、役割分担などについて最終確認をする。この日以降、加藤教授の助言のもと、地元テレビ局アナウンサーに朗読してもらう方言民話を決定し、「プレ白峰方言検定」の問題を作成する。

#### ・ 11月23日（方言イベント本番）

白峰コミュニティホールでの「白峰方言大会」に加藤教授&学生など12名が参加。

11月23日は勤労感謝の日、そして、方言感謝の日

おもっしょいじゃあ じげ弁しま弁って

## 白峰方言大会

「ぎら・うら」「へんめ」「によこめ」「よしたい」「のいの」「し  
ゃんじやにゃあ」「しちよる」「あーみや」「こそびや」「やーとろ」  
など、白峰の言葉には、独特の単語や表現、発音があります。

これらの方言は白峰の大切な宝物であり、少しでも長く伝えていくため  
には、皆さんの理解が必要です。そこで、みんなで考え、みんなで楽しむ  
白峰方言大会を開催しますので、多数ご来場下さい。

日時 11月23日(日) 午後7時～9時

場所 白峰コミュニティホール

- 1 方言パネルシアター  
(出演者) テレビ局アナウンサー、地元中学生、方言伝承者
- 2 方言コンサート  
(出演者) 地元小学生・中学生・高校生  
フルート・ピアノ・ビオラ・バイオリン演奏者

- 3 民話朗読  
(出演者) テレビ局アナウンサー

- 4 プレ方言検定  
(出題・担当)

金沢大学加藤研究室

ゲスト 金子美奈さん

(北陸朝日放送)

安田真理さん

(石川テレビ放送)

主催 白峰雪だるまの里協議会、金沢大学加藤研究室

申込み 特に必要ありません。大声で笑える口を持ってきて下さい。

白峰地区配布のイベントチラシ

白峰方言大会(2008.11.23)から



①オープニング(ゲスト紹介)

北 国 新 聞 2008年(平成20年)11月8日(土曜日)

白山市白峰の方言を長  
年研究している加藤大  
金大国際学類教授(国語  
学)が、白峰特有の言  
語文化の魅力を地域住  
民に認識してもらうため  
に「白峰方言検定」を企画  
する準備を進め、消え  
る方言を世に伝える試  
みで、方言に限定した検  
定は県内でも初めて、二  
十三日に白峰で「プレ検  
定」を実施し、来年の本  
格検定実施を目指す。  
方言検定は、加藤教授  
が研究する学生と一九  
九三(平成五)年から実  
施してきた白峰の方言調  
査の成果を生かし、住民  
と連携して実施する予定  
となっており、

## 「白峰方言検定」実施へ



出題する問題を考える加藤教授(右)と学生—金大

23日に「プレ検定」

コソシテム石川が探  
れた地蔵堂型生ラ  
ロジックの「環」で  
行われ、白峰雪だる  
合だ合わせて実施する。

「白峰方言大会」は、地  
域の小学生に「方言  
カラオケ」や民謡の朗読  
も披露される。加藤教授  
は「若い世代に方言を知  
ることも検定を通じて、  
地域の活性化につなげた  
い」と話している。

「北国新聞」朝刊

2008年11月8日付記事

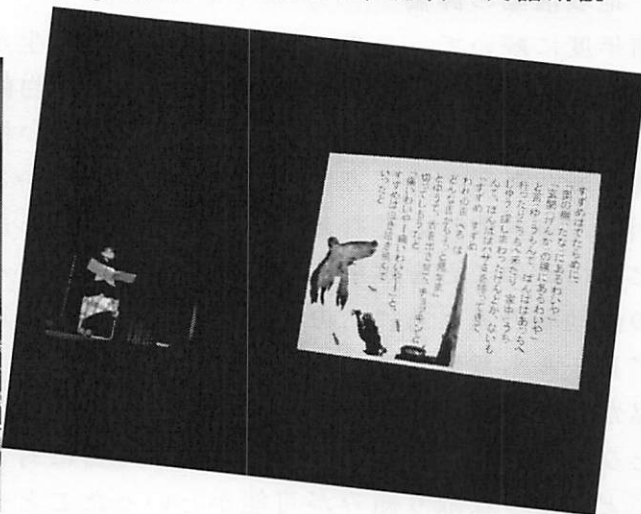
②小学生による方言替え歌



### ③盛況の会場風景



### ④安田アナによる小松方言の民話朗読



### プレ白峰方言検定2008 解答用紙

お名前( )

注)各問題の①～④の選択肢から正しいと思う番号に○で囲んで下さい。  
最後の答え合わせで、正解だったら右の空欄に○、不正解だったら  
×を記入し、○の数の合計を下の点数欄に書き込んで下さい。

正解の場合○、不正解は×

|      |   |   |   |   |  |
|------|---|---|---|---|--|
| (1)  | ① | ② | ③ | ④ |  |
| (2)  | ① | ② | ③ | ④ |  |
| (3)  | ① | ② | ③ | ④ |  |
| (4)  | ① | ② | ③ | ④ |  |
| (5)  | ① | ② | ③ | ④ |  |
| (6)  | ① | ② | ③ | ④ |  |
| (7)  | ① | ② | ③ | ④ |  |
| (8)  | ① | ② | ③ | ④ |  |
| (9)  | ① | ② | ③ | ④ |  |
| (10) | ① | ② | ③ | ④ |  |
| (11) | ① | ② | ③ | ④ |  |
| (12) | ① | ② | ③ | ④ |  |
| (13) | ① | ② | ③ | ④ |  |
| (14) | ① | ② | ③ | ④ |  |
| (15) | ① | ② | ③ | ④ |  |

正解(○)の数

15問中

### ⑤加藤研究室による「プレ白峰方言検定」



【近郊・加賀】

2008年(平成20年)11月25日(火曜日)

北 陸 中 日 新 聞

## 白峰ことば 後世に

住民ら方言検定に挑戦



加藤研究室の学生らの司会でプレ検定に挑戦する参加者＝白山市白峰コミュニティホールで

白山市白峰地域の独特な方言を「地域の宝」として伝えようという「プレ方言検定」が、11月23日(火)夜、同市白峰コミュニティホールで開かれた。白峰方言で歌った。忘れられていく方言を「地域の宝」として伝えていこうと、三月に続いて開催。一九九三年から白峰方言の研究に取り組んでいる金沢大の加藤和夫教授(日本語学)研究室と地元の「白峰雪だるまの里協議会」が協力して開いた。

石川テレビ放送の安田真理、北陸朝日放送の金子美奈、アナウンサーも参加した方言バトルに続き、加藤教授監修のプレ方言検定を行った。

学生の司会で出題された全十五問は、白峰方言の中でも特に忘れられかけている語が中

心で、地元でも昔の人には難しめの内容。白峰方言では、動物や虫の名前に「メ」をつける特徴があるという「ジョシヨメ」は何を指すかというのが第一問。正解は「下ジヨメ」だった。

十五問の全問正解者は会場内にただ一人。園田から称賛の大きな拍手が送られた。(酒井健)

白峰方言大会の様子を伝える「北陸中日新聞」の記事

(2008. 11. 25)

### 3. 地域活動の評価

前年度に続いて、このような形で私たち学生が地域のイベントに関わったことは、地域の人たちにも良い刺激になったはずである。白峰をよく知らない私たち学生にその地域を紹介することは、自分たちの地域を見直すよい機会になるはずだ。前回・今回のイベントを通して、あらためて方言の大切さ、あたたかさなどに気づいた人も少なくないだろう。今回は、方言離れの進む若い人たちを中心としたイベント内容にすることによって、若い人たちにそのことを理解してほしかった。方言イベント（北陸地方で唯一）の実施は、県内の他地域の人たちにも方言に目を向けさせる可能性を秘めており、今後は外に向かってのアピールも意識して活動したい。

私たちの研究室、そして学生にとって、大学キャンパスから外に飛び出して地域の人たちと交流できたこと、衰退しつつある方言に対して地域の人たちがどのように考えているか、どのような取り組みが可能かといったことを考えることで、地域や地域方言に対して新たな見方ができたことは大きな収穫であった。

### 4. 今後、この地域活動を継続、活発化していくために必要なもの、及び課題

方言イベントをきっかけとして、今後も特色ある方言について白峰の人たち自身によく理解してもらい、合わせて地域の歴史・文化への理解を深めてもらうことが重要。そのためには、特徴的であるがゆえにコンプレックスにもつながりやすい方言を、さまざまな形で地域づくりに活用していく活動が有効である。学生パワーを地域づくりに活かすことの効果に目を向けてもらうと同時に、地元の人たち、特に若い人たちの主体的な取り組みとして、この種のイベントが継続されるよう今後もバックアップしていきたい。そして、次年度より方言イベントとは別の時期に「白峰検定」の実施をめざす。

### 5. その他（プロジェクトに参加した学生の感想から）

学生A：私の郷里でもさまざまなイベントがあり、地域の人々との交流はある方なのだが、白峰の皆さんには残念ながら負けていると感じてしまった。“方言”という子どもから大人までが共有しているものがテーマだったせいか、楽しそうであットホームな雰囲気です敵だなあと思うと同時に、自分の故郷が懐かしくなり、祖父母や近所の人々と方言で話をしたいと思った。とても温かい気持ちになれるひとときを過ごせた。

学生B：白峰方言イベントに参加して、改めて地域の皆さんの「方言を大切にしていこう、守っていこう」という強い思いを感じることができ、主催する側としてもとても楽しく、また責任感を持って参加できた。地域の皆さんの熱い思いがあって成り立っているこのようなイベントを今後もぜひ続けていってほしいし、全国でこのようなイベントが行われれば、もっと人々の方言に対する意識が高まっていくと感じた。

学生C：私にはきちんと話せることば（方言）がない。その自覚はあったのだが、このプロジェクトに参加し、真の“地元根差したことば”がどのようなものなのか、また、その裏にある地元に愛する気持ちや濃密な人間関係を目の当たりにし、カルチャーショックを受け、そのような気持ちを持たない自分に寂しさすら感じた。ことばを通しての地域づくりは、自分のアイデンティティーを見つめる素晴らしい機会をくれたと思う。今後は、私のように、地元根差したことばを持たないような人への発信も意識したイベントになれば良いのではないだろうか。

## 白山の魅力発見・創造プロジェクト —おろしうどんのイメージアップ作戦—

学生団体名：白山の魅力発見・創造チーム（金城大学短期大学部）

参加学生：中田大介、田上徹弥（以上美術学科研究生）、土倉勇馬（美術学科2年生）、柴谷広太、戸田香奈恵、晩田真也、松落康弘、松本詩織、中田絵美里、西尾綾子（以上美術学科1年生）以上10名

指導教員：美術学科教授 黒川威人

### 1 地域活動の概要

白峰地区の貴重な食文化である「おろしうどん」は、地域住民にとって欠かす事のできない伝統食であり、冠婚葬祭など人々が大勢集まる機会には、今も盛んに行なわれている民俗文化行事の1つでもある。これを地域おこしのツールとして使えないだろうか、というのが地域からの要望であり、当研究チームは全員美術学科生という特色を生かし、この食文化のネーミングや、調理法、広報デザインを考え、そのイメージアップを図ろうとしている。

### 2 地域活動の具体的な内容

白峰の伝統食文化である「おろしうどん」をテーマに新しい提案を行なうためには、まずは白峰の生活や歴史、文化等を知らねばならない。ほとんどの学生は、白峰は初体験であったため、通算4度、延べ7日間足を運んでいる。活動はおよそ4段階に分けて考える事ができるが、以下順を追って概説する。

2-1 第1段階は、まず地域の人達が作ってくれる「おろしうどん」を食してみる事であった。6月から準備に入り、夏休み直前に試食会と地元の古老から話を聞く機会を白山市地域振興課の方でセットしていただき、雪だるまカフェにおいて実現できた。この時は最初ということもあってか、無理矢理おかわりを食べさせられるというイメージはそれほど強くなく、中にはもっと食べたかったという学生さえ居たほどである。



写真1 第1回試食風景（雪だるまカフェにて）



写真2 試食後地域の古老から話を聞く

同席していただいた白峰の古老の方（山口さん：写真右中央）からは、薤畑を中心とする昔の白峰の生活ぶりや、おろしうどんの由来、食べ方等の興味深い話を聞いた。移動中見かけたダム湖のことや、ダムができる前の生活等、実際に白山麓地域の懐深くへ入って聞く話は試食させていただいた「おろしうどん」の味と相まって、白山麓の暮らしへの理解が確実に深まったと思われる。

2-2 第2段階は、再び味わうとともに自分たちでも作ってみようということになった。3日間の合宿期間をとったので、まず伝統的な調理法・味を地域の人達に教えていただき、自分たちで調理、給仕、食事を体験した。2日目には学生たちによる「現代おろしうどん」を作ってみる事になった。これはあらかじめ予定していたもので、基本的な食材は大学近辺で購入して行ったのだが、地元の食料品店ではより多くの食材を調達した。また手取川の上流域へ食材を探索にも出かけた。

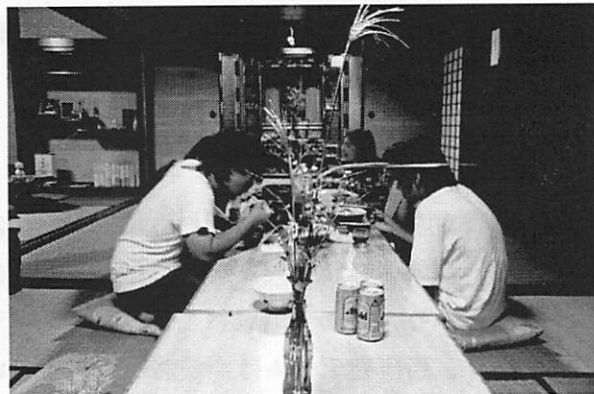


写真3 大量の大根おろしと油揚げを混ぜたところ。 写真4 最初の班が試食中。トッピング材は中央に並べてある。

2日目の夜は我々が用意した「現代おろしうどん」を地元の人たちに食してもらい、意見交換会（交流会）を開催する事になった。夜7時、民宿山和荘の山田氏を筆頭に白峰区会の人達が数人、手に手にお酒やビール、果物等を下げてやってきた。区会の後で食事が出たそうで（かなりお酒も入っておられた）我々の現代おろしうどんはあまり食してもらえなかったが、様々な「おろしうどん」にまつわる話を聞かせていただいた。我々学生チームは作る方と食する方の二手に分かれて実施していたのだが、最後は区会の人達が作ってくれる事になり、強制的に食べさせられるため逃げ回るという体験を初めてした。しかし、実はこれくらいにしないと「おろしうどん」という伝統行事の神髄は味わえないものらしい。

写真は2班目の学生たちが食しているところである。ビールは区会の人たちの差し入れによるもの。なお、手取川源流域への食材探しは、季節柄食べられるものは何もなかったが、下界よりも一足早い秋の草花があったのでこれを採取、食卓の飾りとした（写真右）。

2-3 第3段階はブレーンストーミングによるイメージアップ戦略である。ネーミング案や、「おろしうどん祭」に向けた広報戦略、チラシのデザイン案等も考えた。ネーミング案は多くの案をKJ法により絞り込んだが、結果次の4タイプ17種にまとめた。

- (1) ともかくおなかがいっぱいになるイメージのもの。
  - ・底なしうどん・たらふくうどん・わんこうどん・腹12分目うどん・白峰満腹うどん
- (2) おなかが一杯になったときの体形をイメージしたもの。
  - ・はら丸うどん・ぽんぽこうどん
- (3) コミュニケーションを深める効果に着目したもの。
  - ・わいわいうどん・がやがやうどん・うどん仲間・しあわせうどん・わいがやうどん・麺コミュニケーション
- (4) 文字または言葉の面白さをねらったもの。
  - ・うどん THE うどん・いけめんうどん・どんどんうどん・ドンドうどん

2-4 第4段階は、ネーミングの案をもとに4チームに分かれて「(仮称) おろしうどん祭」のチラシ案（ラフなスケッチ段階ではあるが）を作成した。以下各案を解説する。

チラシ案（ラフなスケッチ段階ではあるが）を作成した。以下各案を解説する。

### (1) はら丸うどんチーム（2案）

お腹いっぱいになる、腹がまるくなることからヒントを得ている。必然的にキャラクターは雪だるまのような形になるところがみそ。ブレイン・ストーミングの中で出てきた「DONDON(どどん)来て、食べて欲しい」や、「いけ麵こみゆにけ〜しょん」のキャッチコピーをちりばめて、楽しい雰囲気を出そうとしている（図1、図2）。



図 1



図 2

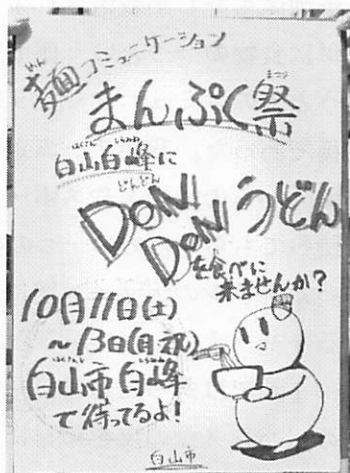


図 3



図 4



図 5

### (2) どんどんうどんチーム（2案）

図3は女子学生チーム制作で、「まんぷく祭」の「DonDon うどん」を「白山市白峰でまってるよ!」と、白峰に来て、祭へ参加するよとの呼びかけを前面に出していて分かりやすい。「麵こみゆにけ〜しょん」をトップに持ってきているのも「何だろう」と思わせる効果があるかもしれない（図3）。

図4は黒川が「このくらいラフなもので良いのだよ」というサンプルとして描いたもので、右上の大きな太鼓をどんどんたたくという音声をイメージしている。1杯食べるごとにドーンと太鼓がなり、一定量を食べ終わると「白山おろし」の嵐のように太鼓が鳴り渡るという訳である。「どんどん」という音の響きと「うどん」という言葉の響きを連動させたつもりである（図4）。

### (3) なだれうどんチーム（1案のみ）

つぎつぎと注ぎ込まれるうどんを「なだれ」ととらえたユニークなネーミングである。「おろし

うどんウィーク」の名物になるのではないかと。彩色 は行っていないが、チームの一人が日本画研究生であったせいか雪だるまカフェの建物や、おわん、ウドンの線描が生きている（図5）。

以上5案が出ているが、ネーミングとともに正式の行事の期間等詳細が決まっていなかったため最終デザインを制作するには至っていない。

### 3 今回の地域活動の評価

おろしうどんについては指導教員ですら知らなかった白山麓の民俗行事であること、それもソバは鳥越地区までしか栽培されず、古来白峰にはソバを食する習慣がなかったという事実。あるいは単に食物の一つという側面以上に冠婚葬祭その他、悲しいにつけうれしいにつけ親類縁者が集うときのコミュニケーションを深める働きのあるものであったことを知ることができたのは収穫であった。我がチームが試みた「現代おろしうどん」は、そうした地域固有の食文化を、地域外からの観光客やスポーツ団体あるいは学生の合宿などにも、仲間の連帯感を高めるために使ってもらうための一つの提案である。学生たちが「(仮称) おろしうどん祭り」を想定して作ったチラシのデザイン案には、こうした伝統食文化の意義を正しく理解したことをうかがわせるキャッチフレーズがみられたことは評価してよいと思われる。

秋には、1泊ではあったが再度白峰を訪れ、民族資料館で歴史的な資料を学ぶとともに、オーバル染め（ハンノキの皮を染材に使ったもの）などの伝統工芸を体験したが、こうした「おろしうどん」とは直接関係のない伝統文化に対しても理解を深めることができたのは意義のあることであった。現地での中間報告会ではなじみになった人たちから激励の言葉もいただいた

### 4 今後、この地域活動を継続、活発化して行くために必要なもの、及び課題。

今回の「地域貢献型学生プロジェクト」は、大学と白山麓地域をつなげるきっかけとなった点で功績は大きい。しかし、海岸部に近い加賀笠間地区から白峰は距離的に遠く、気軽に出かけるというわけにはいかない。どうしても宿泊が前提となるため、その費用とともに、勉学以外にアルバイトを行うことが日常化している学生たちには時間的な困難が伴う。一般からも「おろしうどん作り」を公募する。その中に学生チームも入るぐらいの方がよいのではないかと。広報デザイン（おろしうどんウィークチラシ、キャラクターなど）も大切で、これに対する制作費が認められていないのは非常に不都合であり今後の課題である。

### 5 その他（学生や地域の方からの感想等）

ネーミングと現代おろしうどんの試作については様々な意見や提案が出たが、まとめてみると次のような事がいえる。

- (1) 大量に食しても飽きないためには、地域の特色や季節をいかした薬味などの「トッピング材」はあった方がよいと思われること。
- (2) 単なるおいしい食べ物というのではなく、仲間の連帯を深める楽しいイベントとしての側面をアピールした方がよいと思われること。
- (3) ネーミングは1つに限らず、例えば、「白山おろしうどん祭（仮称）」を開催し、「創作おろしうどん」のコンテストを行なうことで、毎年新しいタイプのおいしいおろしうどんが開発でき、知名度のアップにもつながるのではないかとと思われること。
- (4) 方言を研究しておられる金沢大学の加藤和夫教授からは、白峰独自の方言による22通りのネーミング提案があり、地域の人達からも白峰方言が望ましいという声がある。学生アンケートでは「やあとろうどん」「さいさいうどん」等が有力視されているが、最終決定は地域の人達の意見によってなされる事が望ましい。

以上

## 重要伝統的建造物群指定に向けて、古民家再生による地域おこし

学生団体名：金沢工業大学 谷研究室

参加学生：三木 脩平・上田 悟史・鳥越 友香里・高野 健・深堀 貴裕 他 12 名

### 1. 地域活動の概要

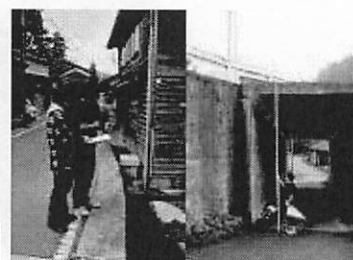
重要伝統的建造物群保存地区選定の先行的活動として、古民家再生の雪だるまカフェを中核としたまちづくりを推進する。白峰地区は、平成 17 年 2 月に 1 市 2 町 5 村の合併によって、アイデンティティの喪失や、過疎化・高齢化の一途をたどっている。そこで、本プロジェクトでは、白峰地区の重要伝統的建造物群保存地区への選定を視野に入れ、街並みや地域の資源発掘、活用によって、地域に活気をもたらすことを目指している。



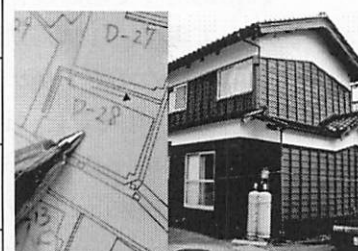
### 2. 地域活動の具体的な内容

#### 1) 現地調査

伝統的景観づくりの検討と模型製作、雪だるまカフェの文化財登録に必要なカフェの現状や街並みなどの調査を実行した。具体的に模型製作に必要な調査として、建造物の外観と主要な工作物の撮影、土地の傾斜の測定を行った。

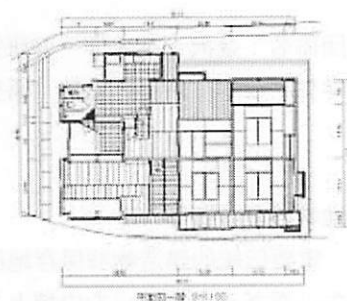


| 日時        | 内容                                    |
|-----------|---------------------------------------|
| 6 月 23 日  | 模型調査<br>建物の調査・撮影 (5 名)                |
| 7 月 4 日   | 模型調査<br>建物の調査・撮影 (12 名)               |
| 7 月 18 日  | 模型調査・文化財登録用調査<br>建物の調査・撮影 (12 名)      |
| 8 月 28 日  | 模型調査・文化財登録用調査<br>地形の勾配の調査・撮影 (16 名)   |
| 9 月 3 日   | 模型調査<br>地形の勾配の調査・撮影 (8 名)             |
| 9 月 12 日  | 模型調査<br>上記 5 回の調査の補足調査 (6 名)          |
| 11 月 10 日 | 伝建調査 工作物<br>建物以外の石垣などの調査 (6 名)        |
| 11 月 14 日 | 伝建調査 植生<br>地区内の植物を中心とした植生の調査 (6 名)    |
| 12 月 5 日  | 伝建調査 フェンス等<br>景観阻害要素となり得るものの調査 (10 名) |



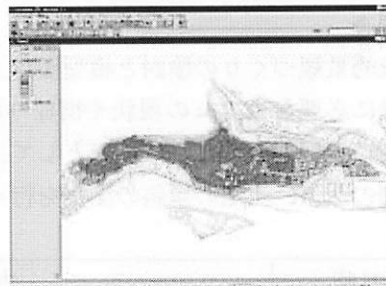
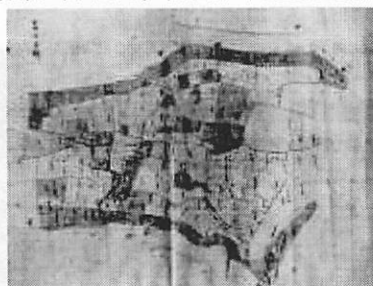
## 2) 登録有形文化財に向けた資料づくり

雪だるまカフェとして活用されている古民家を文化財に登録するための資料を作成する。登録に必要な資料として、都道府県の進達書、市町村の意見書、所有者の同意書、所見、候補物件位置図、配置図、平面図、求積図、計算表、通常望見できる範囲の図、概観写真がある。それらを提出書類として使用できる形に整理、書面化した。現在、必要資料を揃え終え、文化庁に提出する段階にあり、登録は21年夏頃を予定している。



## 3) 重要伝統的建造物群保存地区選定に向けた伝統的景観づくりの検討

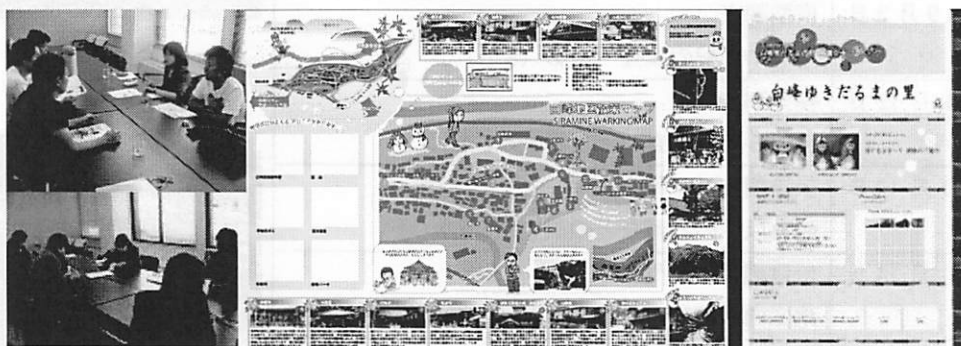
現地調査などで得た情報をGISやCGを活用して検討する。さらに重要伝統的建造物群保存地区選定に向けた景観整備やまちづくり活動について提案する。そして、地図データや現地調査だけでは把握できない部分に関しては、実際に住民の方に尋ねるなどして資料作成を進めている。また、住民の理解も伝建地区指定にあたって必要不可欠となってくる。そのため、住民への説明会が行われ、住民に伝建を理解してもらえるような活動も積極的に行われている。



## 4) 雪だるまカフェからの情報発信

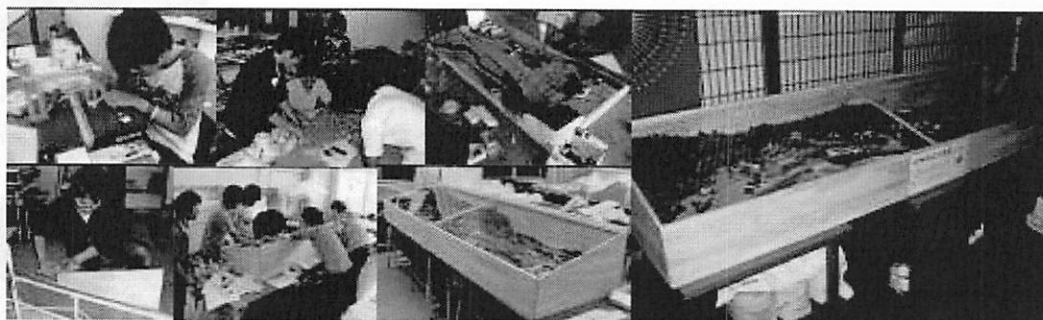
HPは雪だるまカフェを中心として、地区全般の情報発信を行うことを目標としている。それにあたって地区の有志で構成されている雪だるま倶楽部の方との話し合いを行い作成した。そして現在、「白峰雪だるまの里協議会」のHPとして公開している。また、それと連動して白峰地区のガイドマップを白山市観光協会と合同で作成している。このガイドマップを上記のHPで公開するなど、連動させることも見据えている。

8月、9月、11月に計4回の白峰雪だるまの里協議会と、9月に観光協会との打ち合わせを行い、進捗状況を連絡しながら製作を進めている。



## 5) 模型の製作

白峰地区全体の模型（1：500 スケール）を製作した。昨年、同地区の南側を、本年は北側を製作し地区全体の模型が完成した。現地調査とそれだけでは分からない部分は白峰支所の方などに聞き取り調査をした。製作は大学内で学生のみで行ったが、完成した模型は雪だるまカフェの入口脇に置かれている。これにより、カフェを訪れた方が地区全体の雰囲気を把握することが期待できる。



## 6) 街並みライトアップイベントの実施

地区の魅力アップを目的としてライトアップイベントを行った。ライトアップイベントは他のプロジェクト（イベント）と連動させた。当日までの準備に関しては主に雪だるまの里協議会の方々と学生で行った。しかし、当日は住民も率先して設置を行うなど、住民主導で行えた。また、白山市のクリーンセンターに集められたビンを用いて、照明用のライトカバーを製作した。

| 日程     | 内容                                  |
|--------|-------------------------------------|
| 11月2日  | ライトアップイベント<br>いしかわこども未来創造まちづくり事業と連動 |
| 11月6日  | ビン集め<br>ゴミ処理場へライトアップ用のビンの収集へ        |
| 11月9日  | 総湯オープンイベント<br>同イベントと連動したライトアップ      |
| 12月23日 | ライトアップ実験<br>新たに改良を加えた照明機器の現地実験      |



## 7) リトルジャマーの設置

雪だるまカフェの魅力の一つになることを期待して、リトルジャマーという音楽に合わせて動く人形を設置した。これにより長く居心地のよい雰囲気づくりにつながったと考えている。また、人形の周りの土台は、既成品を用いるのではなく、一から手作りで作りあげた。それにより既製品では出せない、温かみと風合いが表現できたと思う。実際に、カフェを訪れた方から高評価を得ている。



### 3. 地域活動の評価

#### 1) 「全国過疎問題シンポジウム 2008in いしかわ第2分科会」への参加

平成 20 年 10 月 23 日に開催された同シンポジウムにおいて、本プロジェクトについて発表した。ここでは、地域と学生が協力して地域おこしを行っているということで紹介され、他地域の方々からも評価された。



#### 2) 新聞記事や雑誌に掲載

本プロジェクト活動の模型製作と HP 作成、ライトアップイベントについて北國新聞と北陸中日新聞で掲載され、JAL 発行の「SKYWARD9 月号」、ルートイングループ発行の「旅人よ」に掲載された。



### 4. 今後、この地域活動を持続、活発にしていくために必要なもの、及び課題

#### 1) 地元住民との更なる協力

雪だるまカフェを介した交流などを積極的に行い、今年度以上に住民との関係を密接にし、より地区に入り込んだ活動を行っていく必要がある。そのためには、情報公開を積極的に推進する。そのツールとして HP、ガイドマップなどが挙げられ、住民の意見を踏まえたものに更新していく必要がある。

#### 2) 旧山下家の活用

雪だるまカフェの左奥（南西側）に昨年まで使用されていた民家（旧山下家）がある。こちらの民家も雪だるまカフェ同様に地域おこしの拠点施設として活用する。しかし同カフェとは異なり、建物自体は伝統的な白峰型住宅というわけではなく、一般的な現代住宅である。そこで、その用途を活用し、簡易宿所という形態を取る。ここは主に研究室単位やサークルの合宿や現地調査時の宿泊場所として提供することを予定している。



### 5. その他

HP やガイドマップの公開、シンポジウムなどへの参加を行うことで、地域おこしに興味のなかった方や興味はあったが何をしたらいいのかわからなかった方、外部の白峰地区を知らなかった方々への情報発信が行える。それによりこの地区に関心を持ち地域おこしを行おうとする人が 1 人でも増えることを期待している。私たちは住民にお手伝いをするだけであり、地域おこしは住民主導で行われてはじめて意味のある活動であると実感した。

## 地域住民と協働した廃校校舎の学び舎プロジェクト

学生団体名：池田ゼミナール（金沢星稜大学 経済学部）

参加学生：細田裕介・蓮本雅弘・坂本 憲・榎野翔悟・松田 剛・山上裕美 他 11 名

### 1. 地域活動の概要

昨年度末で廃校となった旧穴水町立兜小学校を拠点とし、地域住民と交流を持ちながらその利活用策と地域コミュニティ活性化策について共に考え、穴水町が保有する地域環境を活かした学び舎づくりに取り組んだ。実際に同町兜地区に複数回足を運び、農林漁業体験活動や農林漁村宿泊体験等の地域住民と学生たちとの交流を通じて、能登の風土を再確認し、その利活用策やコミュニティ活性化策について共に考えた。特に旧穴水町立兜小学校をその拠点に、地域環境を活かした学び舎として、町外・県外からの人々の利用も含め再活用することを目指し取り組んだ。

### 2. 地域活動の具体的な内容

#### （1）兜地区及び小学校の現地調査

実施日時：平成 20 年 8 月 4 日（月）午前 8 時～午前 11 時

開催場所：穴水町立兜小学校、兜地区公民館

参加者：穴水町教育委員会事参与 米田省一 氏、兜地区区長 村上太一 氏、金沢星稜大学学生 10 名



写真1 校舎風景



写真2 体育館風景

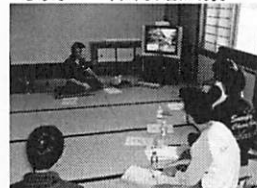


写真3 区長との談話会

はじめに、兜地区において、祭りやイベントを通じて、住民たちと交流し、廃校プロジェクトへと繋げていくことが大切であると感じた。そこで穴水町教育委員会 米田省一 氏の依頼を経て、兜小学校の視察に加え、同地区区長 村上太一 氏と兜の祭りやイベントへの参加について談話する機会を頂いた。

まず、兜小学校の見学から活動を開始した。外見からの校舎や体育館の雰囲気はログハウスのような建物であった。運動場は陸上競技を行なう場所を含め、かなり広く、相撲場や蓮の池もあり、天然芝がほとんどのグラウンドであった。その後は校舎・体育館内も見学したが、普通の小学校と変わらず、新鮮な感じがかった。廃校となっていたが文庫本は棚にそのまま置いてあった。

次に、兜公民館にて区長及び公民館長でもある村上太一 氏と談話した。同地区の伝統的な祭りとして8月23日に行われる「甲曳舟祭り」があることを聞き、その伝統や歴史についてお話を頂いた。また、祭りを行っている風景をDVDで鑑賞する機会も頂いた。実際に私たちも昨年度の大学コンソーシアム石川、地域課題研究ゼミナールで穴水町に深く関わり、地域住民と連携し、活動していることも理解してもらった上で話を進めた。祭りに参加する形としては、地域の方と共に神輿を担いで、祭りを共感し、楽しみたいことを伝えた。最後には“祭りの当日はよろしく願います”という温かい言葉も頂いた。

#### （2）甲曳き船祭りへの参加・交流

実施日時：平成 20 年 8 月 23 日（土）午前 8 時～午後 3 時

開催場所：兜地区及び甲比古神社境内

参加者：兜地区の住民 約 30 名程度 金沢星稜大学学生 14 名

甲曳き船祭りの参加者として、金沢星稜大学 池田ゼミナールとして 14 名が祭りに参加した。私たちは、穴水町の長谷部祭りに使用されるハッピーを身にまとい、14 名がローテーションで組み代わりながら地域の方々と神輿を担ぎ、兜地区を回ることとなった。この日の天候は生憎の雨で、海の波が高く、船で神輿を運ぶことが出来ず、軽トラックで始点まで運んだ。始める前に杯で日本酒を頂き、神輿を担ぐ前には、各自ビール・梅酒等を 1 つ貰い、勢いづけに飲んでから開始した。私たち学生は車で来ているため、運転手は飲酒できなかったが、休憩所で出される食べ物は皆で一緒に沢山頂いた。神輿を担ぎ“チヨーサー、チヨーサー”と掛け声をあげ、民家の前を通過する際は、“ワッショイ、ワッショイ”と神輿を上下に揺らした。途中で保育園もあり、その子どもたちとも交流した。神輿を担ごうとする

姿が見られ、“重いつ、メチャメチャ重いよお”と言いながら一緒に祭りを楽しんだ。私たち学生は、神輿だけでなく、神輿を支える台や太鼓も運び、休憩時には太鼓を叩くパフォーマンスもあった。地域住民から“やってみるかい？”と言われ、一部の学生が太鼓叩きを体験した。始めは叩き方のテンポが分からずに苦戦していたが、何回かやっているうちに慣れてきた。住民の方々とは、大学の話や就職の話もして盛り上がった。その他には兜の話や祭りの特徴・由来、兜小学校についても何人かの人に聞くことが出来た。神主がいた棟元から黒崎、至成、小甲、大兜の4つがあり、神様が休憩するところと知られていることが分かった。10年前は賑やかで活気があったそうだが、過疎化・少子高齢化の影響で人手不足となり、祭りが出来ない状態にもおかれている。1度なくなったら復活は難しいことや、廃校の兜小学校については、具体的な案は出ていないと話した。兜小学校の利用活用策については様々な課題があったが、私たち学生が祭りに参加したことに対しては、大いに喜びを見せていた。“祭りに参加してもらい、ありがたい”“若い世代の人数が増え、祭りが活気付いた”と歓喜した。その期待に応えたいと思い、私たち学生は精一杯最後まで頑張った。神輿を担ぐことに関して、未経験者が多かったが、兜比古神社の境内の頂上まで神輿を担ぎ通し、兜地区の方々と達成感を味わうことができた。



写真4 兜曳き舟祭り 活動風景

### (3) 学校群視察及び廃校舎利用に関する検討会の開催

実施日時：平成20年10月18日(土) 午前9時～午後6時

開催場所：穴水町立(穴水小学校・穴水中学校・向洋小学校・向洋中学校・松丘小学校・兜小学校・諸橋小学校・鹿波小学校)・兜公民館

参加者：兜地区区長 村上太一氏、同地区住民 約20名程度、金沢星稜大学学生 6名

先回の祭りにおいて、地域住民との交流を経て、私たち自身も兜小学校の利活用策の寄与に最善を尽くさなければならぬと、強く感じた。そこで、穴水町における学校群を視察し、学校内・外の環境を把握することにした。兜小学校を含む6つの小学校を訪れたところ、現在開校中の学校もあれば、既に廃校となり、有効利用の検討がされて



写真5 学校群視察風景



写真6 意見交換会風景

いる学校とされていない学校が確認できた。また、「四季の丘(旧松ヶ丘小学校)」を訪れた際には、おおぞら農業協同組合 ふるさと体験村 四季の丘の支配人である森岡善弘氏とも話をすることができた。学校群の視察をしていることを伝えたら、“ごくろうさん。もし時間があったら室内で休んでいいよ”と歓迎してくれた。実際に廃校となり、有効利用の検討がなされていなかった小学校は、校舎もグラウンドもそのままの状態に残されており、“もったいない”の一言に尽きる状態である。

意見交換会においては、穴水町教育長 今村貞夫氏、同地区区長 村上太一氏を含む、兜地区の住民約20名が同席した。今回のプロジェクト事業として、地域の方々との交流を基に兜小学校の有効利用の検討を試みることを伝えた。意見の中に“祭りなどに学生のような若者が参加して非常に活気が出た”という喜びの声が聞かれた一方で、“祭りなどの一時的な兜地区への参加交流だけで本当に地域貢献に繋がるのか疑問だ”という厳しい意見も聞かれた。しかし、同地区により深く関わり、理解した上で検討して欲しいという気持ちから、私たち金沢星稜大学の学生に大きな期待を寄せていると感じた。

### (4) 全国過疎問題シンポジウムにおける情報発信

実施日時：平成20年10月24日(金) 午前9時～午後13時

開催場所：穴水町；キャスル真名井

参加者：穴水町の地域住民や行政関係者、全国の地域連携過疎問題に関わる方々や高等教育機関関係者、金沢星稜大学学生 16名

総務省・全国過疎問題シンポジウム実行委員会の主催により、過疎地域の自然・歴史・文化を活かし、過疎対策の評価をすると共に、地域づくりの手法、今後の過疎対策のあり方等について、行政関係者を含む、住民や地域づくりの関係者を交え、幅広い議論を深め、参加者総合の情報交換・交流を図るため

に開催された。分科会での発表となり、輪島市、穴水町、七尾市、能登町の4つに分かれた。私たちは第2分科会の穴水町の「大学等と連携した地域づくり」の会場で発表を行った。そこでは、私たちが今までに穴水で行ってきた活動をきめ細かくまとめ、旧兜小学校の利活用策を考案するために、地域住民と様々な交流を通じながら活動したことを中心に話した。また4. 今後の課題の記載事項も発表し、パネルディスカッションの際には大学生として地域活動に寄与する素直な気持ちを伝えた。発表会には、行政・住民の方のみならず、全国の高等教育機関、地域連携促進協議会の方々が参加していた。これにより過疎地域全体が少しでも良い地域になることを期待したい。



写真7 分科会発表風景 写真8 ディスカッション風景

#### (5) 兜文化の集いへの参加・交流

実施日時：平成20年11月9日（日）午前9時～午後12時

開催場所：穴水町兜公民館

参加者：兜地区住民約40名程度、金沢星稜大学学生9名

10月18日（土）の意見交換の際に兜地区の区長である、村上太一氏から今後のイベントの話を伺ったところ、11月9日に兜文化の集いというものがあると聞いた。主に、商品売買のバザーも含め、大きな鍋を使って煮込む、つみれの味噌汁や刺身などを食べて兜地区の住民の方々が集うというイベントであった。



写真9 文化の集い活動風景

今回私たち、学生9名が兜公民館へ足を運び、住民と共に参加した。祭りの参加もあったことから、地域の方々は歓迎してくれた。イカの刺身やおにぎりに加え、日本酒やビールなども勧めて頂き、より兜の方々と近い関係になりつつあると感じた。また、つみれ味噌汁の味噌や具を入れるのを一緒にやらせて頂いた。この機会を通じて、兜の方々にも兜地区に関する知識等を教えてもらった。まず、祭りへの感謝の言葉として、“活気がついてよかった。これからも若い人がアイデアを出して頑張ってもらいたい”との声が聞かれた。町民の願いとして年間行事を企画なしで作ることも望んでいた。

#### (6) 文部科学省 平成20年度「豊かな体験活動推進事業」～農山漁村におけるふるさと生活体験推進校～へのスタッフ参加

実施日時：平成21年2月12日（木）～2月14日（土）午前9時～午後5時

開催場所：穴水町「ふるさと体験村 四季の丘」並びに周辺地域

参加者：星稜中学校生徒学生40名、金沢星稜大学学生9名

本事業は、金沢星稜中学の生徒が能登地域をフィールドに、農村・漁村体験や民泊体験を通して自分たちの故郷について考え、再認識することを目的としており、またそれらの体験活動における集団行動を通じてリーダー性、協調性、規則正しい生活態度を身に付けることを目指している。輪島塗工場の見学や珠洲焼体験、班ごとに分かれてのカキ・ナマコ洗浄作業や椎茸植菌作業を行うことで、次世代を担う中学生に農漁業の良さを感じてもらうことができた。また、民泊体験も行い、実際に地域住民の民家に停泊することで、穴水町の住民の温かい気持ちにふれることもできたと考えられる。



写真10 農漁業体験風景 写真11 民泊体験風景

### 3. 地域活動の評価

#### (1) 若者の力を祭りの強力な戦力として応えた。

甲曳舟祭りに参加した際に、地域の方々は温かく迎えてくれた。そして、若者が祭りに参加する機会はありませんでした。そのため、“学生のような若者たちの参加が祭りを活気づけた”“祭りが賑やかになり、若者の力強さが伝わった”という意見が聞かれた。よって、私たち学生の方に期待していると感じた。

## (2) 今後、地域と連携して学生の視点からも改善策を提言するきっかけとなる

祭りの参加に歓喜している住民がいる一方で、厳しい意見も聞かれたが、学生への大きな期待を感じた。しかし、学生の立場からは動ける範囲にも限度があるため、少ない訪問の機会に様々な情報を収集し、改善策を打ち出さなければいけないと実感した。

## 4. 今後の課題

### 廃校ネットワークの構築

現在全国には多くの廃校があり、今後もその数は一層増加するものと推測される。その中で、地域の人口は減少してもそこにある自然・歴史・文化がなくなるわけではない。したがって、これらを残し、伝えることは地域のためだけではなく、今後次世代を担う子どもたちや、若者にとって学ぶことができると考えられる。多くの廃校群がある中で、四季の丘(旧松丘小学校)は、周りの地域環境を活用して、まいもん体験農園等の活動拠点として利用されている。私達はそれに加えて、四季の丘と兜小学校を連携させながら、地域の学び舎としての活動拠点へと利活用するために、これらの地域住民、行政、高等教育機関の協力が必要であった。そこで〔写真 12〕

のような、廃校ネットワークを結ぶことを考えた。主に、廃校を利用し、地域の方と共に、交流しながら、様々な体験活動の実施に加え、大学が保有する知的財産や若者たちのエネルギーをその地域に投入する「能登シーズンキャンパス」の会場として使用する。また、地域住民に加え、穴水町内・外、県外の方々を対象に能登の暮らしや知恵について教え合う学びの場となる「かぶと塾」の開校も検討された。このような形で地域と地域、人と人を結ぶネットワークづくりを築く。主に知的財産やエネルギーを自然・歴史・文化が豊富な能登地域に流入させることによって、その1つ1つが教材となりお互い勉強する場所として、廃校群を利活用すること、その1つが「廃校ネットワークづくり」だと考えられる。今年度において、この穴水町を舞台に本学が所属する同学園内の星稜中学校の子供たちの農村・漁村体験が授業の一環として行われた。これに引き続き、来年度には、研究室レベルを超えて大学レベルとして廃校ネットワークづくりに地域と協働していくことが池田研究室を中心に計画が進められている。

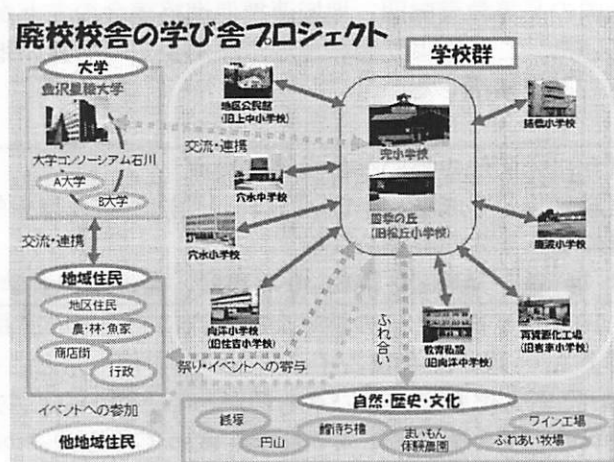


写真 12 廃校ネットワークの構想図

## 5. その他

### 学生の声

- ・祭りは今まで参加した中で最も印象深く、農漁業の交流を通じて能登の素晴らしさが理解できた。
- ・大学から地域へ飛び出して研究を行うことは貴重な体験となった。廃校利用策の検討やシンポジウムの各団体の発表が少しでも過疎地の力になれば幸いです。
- ・祭りでは子どもが少ないと感じた。伝統的な掛け声と町の一体感を残すために、子ども用の神輿を用意する等参加できる体制があればよいと思った。
- ・まだまだ使える廃校を学生と地域の活動の場に有効に利用できればよいと思った。
- ・地域の人々とふれ合うことでその文化、風土を体感できた。また、祭りでは直接地元民とコミュニケーションをとることで一体感が生まれた。
- ・この取り組みを通して、穴水町の恵まれた自然環境を生かすことと、地域住民の連携が、廃校舎の利活用につながると再認識した。
- ・兜の祭りやイベントに参加して、人の温かみや優しさに触れることが出来た。
- ・これから社会へ進出していく上では貴重な体験であり、今後に生かしたい。
- ・地域住民と共に神輿を担げたことが本当に楽しかったです。

### 地域の方々の声〔甲曳舟祭りにて〕

- ・祭りが活気づいて、賑やかになった。
- ・機会があればと言わず、また是非来て下さい。

## 輪島市金蔵における金蔵万燈会と金蔵産コシヒカリのブランド戦略

学生団体名：知的財産法ゼミ（金沢大学法学部）

参加学生：桜井雅之・中谷祐介・岸本範子・山中啓太・田中美奈（他6名）

### 1. 地域活動の概要

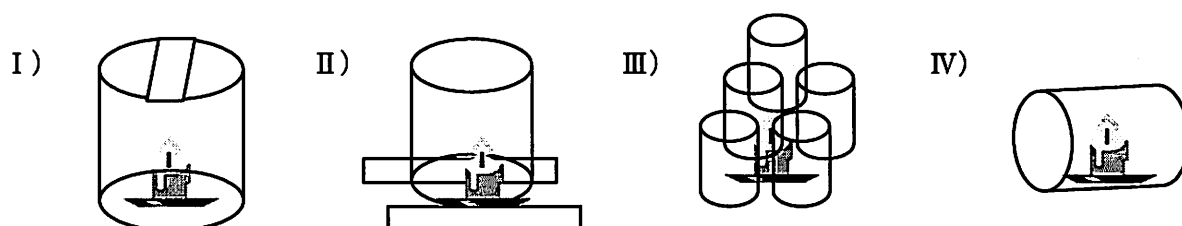
私達、金沢大学法学部知的財産法ゼミは、今年度石川県輪島市金蔵地区のお祭り“金蔵万燈会”の準備にボランティアとして参加し、燈火の設置・会場設営等に助力すると共に、金蔵万燈会の当日に、祭りの来客に、地元で作られているコシヒカリの名前を募集し、新たなブランド米を立ち上げることを提案した。そして、万燈会に参加した際の考察を集約し、万燈会の今後の方針を練ると共に、これから金蔵万燈会をどのようにしてPRしていくかを、現地の方々との意見交換を交えながら検討した。

### 2. 地域活動の具体的な内容（6月29日～8月17日）

6月29日に、私達はゼミ生5名と現地の方3名を交えて第一回の打ち合わせを行い、現地の方から金蔵地区の現状や、今年の8月16日に行われる万燈会の主な内容が、金蔵五ヶ寺（金蔵寺・慶願寺・円徳寺・正願寺・正樂寺）境内および周辺を会場に、集落の田んぼの畦道や崖など、いたるところに燈火を並べ、祭りの夜は幻想的な光景を楽しむことが出来るというもので、昨年の来客数はおよそ5000人であると説明を受けた。そこで私達は万燈会に使う燈火が、酒カップの中にローソクを入れただけの簡単なつくりで、雨が降った場合に使いなくなってしまうということを知り、急遽雨対策を考えることとなった。現地の方の話によると過去7回においては、奇跡的に一度も雨が降ったことがなく、3万個もの数がある燈火に雨対策を施すとなると膨大な労力とコストがかかることもあって、やむを得ずそこには、目を瞑ってきたということであった。

しかしながら、流石に幸運は何度も続くものではないと思われたため、雨対策を考えてみたものの、コストがかからず且つ短時間で出来る簡便な方法を考えるのは無理があった。

7月6日に再度打ち合わせを行った際に実際に提案したものをいくつか紹介する。



I) 大分県竹田市のお祭りの燈火雨対策を参考に、カップの口にセロファンを貼る

II) カップを逆さにして、割り箸などで空気穴を作る

III) 5個1組でタワーをつくり中央にローソクをおく

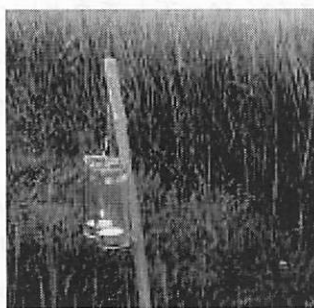
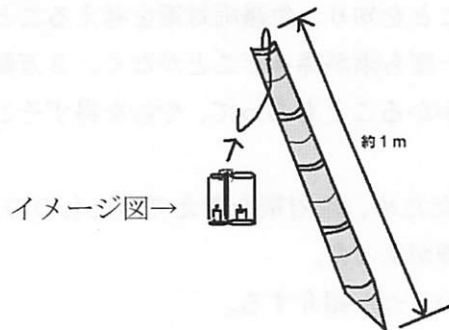
IV) カップを横にして置く

いずれも苦し紛れの策で、Ⅰ) はカップの背が低いので数分でセロファンが溶ける  
Ⅱ) は割り箸でも3万個分の材料を買うのは困難、Ⅲ) は効率が悪く設置に時間がかかる。と問題の解決には役立たなかった。Ⅳ) もすぐに熱で割れるのでは?と思われたが、実際に火をつけてみると予想外に健闘した。しかしながら、20個ほど並べて実験したところ2時間ほどですべてのカップが割れてしまい、結局不採用となったため、雨対策はできないまま準備を迎えることとなってしまった。

次に、6月29日の打ち合わせの際、私達は万燈会の準備とともに、地元の方から今年の秋、金蔵産のコシヒカリをPRする方法を考えて欲しいとの依頼を受けていたのだが、せっかく万燈会にたくさんの人がやってくるのだから、万燈会を利用してコシヒカリの名前を“OO米”といった具合で募集し、一気に新しいブランドを立ち上げてはどうかと考え、7月20日の打ち合わせの際に、現地の方と相談したところ、それは面白いと快諾を受け、名前考案者のうち優秀者数名には今年の新米の金蔵産コシヒカリ 10Kg を賞品として提供して下さることになった(秋の収穫が終わり次第発送)。また、東京や大阪等の遠隔地からの来客に対しても、名前を考案してくれた方には口コミ効果を期待して3kgを提供することが決まった。その際に金蔵万燈会についてのアンケートもとることによって、来客数の実態の把握や万燈会への要望等も収集ができ、今後の方針策定にも役立てられるため一石二鳥の策と考えられた。

早速、個人情報等の取り扱いについて協議したうえで、アンケートは学生のみで行い、屋台の集まる中央ステージとイベントの行われる正願寺の2箇所で行うこととし、名前の募集表兼アンケートを2000部準備した。また、金沢大学の学生が調査を行っていることを明示するため、金沢大学の校章旗を用意した。

そして、8月15日の万燈会前日を迎え、私達は、地元の方々20名ほどと一緒に燈火を吊るす竹杭を崖部や林道に設置した。

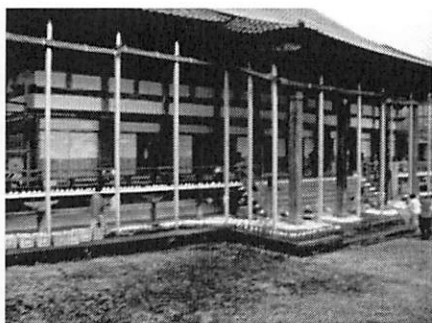


燈火を吊るすことによって、あたかも灯が浮いているかのような幻想的な光景を演出できるのだが、炎天下の中、草原や藪・崖に分け入って設置するのは足場の不安定さと藪蚊との戦いもあってなかなか大変な作業であった。夕方には作業を終えることが出来たが、次第に暗雲が立ち込めてきて、夜には雨が降ってきてしまった。

8月16日の万燈会当日は、朝から警報が出るほどの豪雨に見舞われ、金蔵はいたるところで水たまりの状態になった。14時には現地の方々の協議の結果、燈火の屋外への設置の中止が決定し、お寺の境内周辺や軒先などの限られた場所にだけ設置することが決まった。雨のため私達の他にも参加予定だったボランティアの人達の大半は不参加になったため、建物の軒先に燈火を並べる作業はかなり大変なものになった。最終的に私達11名で約2000個を設置した。

当初、お寺の境内の傍は火災の危険があるため燈火を設置しない予定だったが、お寺の方との協議の結果、私達が見張りをするというので設置が決まり、境内では各々で設置に工夫もしてみた。

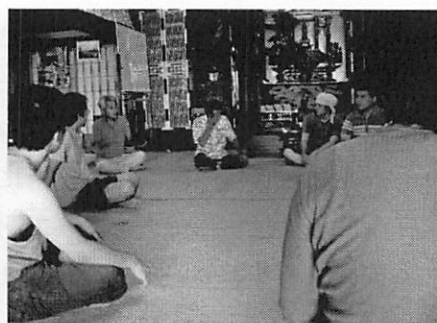
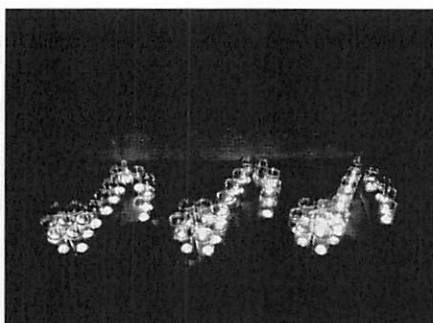
燈火の数は大幅に減ったものの、雨が降る中、境内には幻想的な光景が演出された。



↑

境内軒先に並べられた燈火

↑



↑ 現地の方との反省会の様子

夜まで雨が降り続いたため、訪れる人はまばらで、アンケートの実施は諦めざるを得なくなった。

翌日の8月17日も、朝から雨が降っていたものの、地元の方は中央ステージのテントの解体に向かい、私達は並べた燈火の回収に当たった。最後は、皆で協力して金蔵の中央に立てられたキリコの解体作業を行い、全員で昼食をとって反省会を行った。

### 3. 地域活動の評価

今年度の万燈会は、大雨という不幸に見舞われたことで、これまで順調に来客数を増やし規模を拡大してきた祭りとしては大きな挫折を味わうこととなった。また、金蔵産コシヒカリの早期のブランド化の構想も新名称募集が出来なかったことで頓挫してしまった。ただ、私達が雨対策を講じられなかったことは悔やまれるが、付け焼刃ではどうにもならない状況であったことも事実である。

しかしながら、地元の方との反省会でも、奥能登における一大イベントに昇華していくためには、乗り越えていかなければならない経験であったとの意識を共有することができ、今一度、これまでの万燈会の運営や、活動方針を見直す契機となったという点で、有意義であったと思われる。

私達が、今年の万燈会の活動においてできたことは、雨の中諦めずに燈火を並べることであったかもしれないが、来年度のリベンジに向けて数多くの収穫があり、地元の方々との情報交換を通して、次項で説明するような次につなげるための課題を提示することが出来たという点で、ある程度の貢献は出来たのではないかと考えている。

### 4. 今後、この地域活動を継続、活発化していくために必要なもの、及び課題

#### I) 雨対策が必要

雨が降っては客足も遠のくのは仕方がないのだが、いくつか策を考えてみた。

##### 1) 燈火自体の雨に対する工夫を考える必要性

→ 今年度は、時間も予算もなかったため施すことが出来なかったが、何とかして使えそうなものを模索していきたい。

##### 2) 屋内（主にお寺）で出来るイベントを考える必要性

→ 防火対策をとれば、屋内でも燈火の設置は可能と思われるため、お寺の境内に設置する場合についても工夫の余地がある。

また、金沢大学の吹奏楽部やオーケストラ・アンサンブル金沢の協力を得て境内でのクラシック音楽の演奏会を行ってはどうかという提案も行った。（今年度は伝統音楽の演奏を行っていた）

## Ⅱ) 暗闇を最大限に生かすことは出来ないか？

四方を山に囲まれ、街灯もなく家屋が点在するのみの金蔵の夜の暗さは、野田山でさえ目ではないものであると気付かされた。(空気も透き通っていて夜空も美しい)

この暗さは、都会では絶対に体験することが出来ないという点で逆に貴重であると思われる。金蔵の里全体に燈火を並べて明るくする必要性はないようにも思えるので、漆黒の闇と、幻想的な光のメリハリの効いた配置を考えるべきであると提案した。

## Ⅲ) 万燈会のシンボルの不存在・陳腐化への対策が必要ではないか？

集落のいたるところに並べられた燈火の光景は壮観であるが、毎年、ただ集落全体に燈火を並べるだけでは陳腐化してしまう恐れがある。実際、燈火を使う似たようなイベントは県内だけでもかなり開催されるようになってきている。(ex,千枚田あぜの万燈 この点は、現地の方々も危惧しており、幾何学模様の燈火配置や色セロファンを利用した様々な色の燈火の作成等を試行している)そこで私達は以下の案を提示した。

- 1) メインとなるオブジェの作成→ 燈火で巨大なオブジェを作る (ex.ピラミッド)
- 2) テーマパーク型のイベント配置

例) 〇〇 寺に行くと巨大なオブジェがあり、〇〇 寺では伝統料理が振舞われ、  
〇〇 寺にはカブトムシとのふれあいコーナーがある

という具合に、ただ来客に漫然と眺めてもらうのではなく、客層を考慮した個々のイベントを提示して誘導し、“周ってもらう” ことにより飽きさせないようにする。

- 3) 地元でしか味わえない料理の提供

綿菓子や焼きそばの屋台だけではどこにでもある風景なので、地元の特産品を使った料理を出せるようにできればと考えられる (今年度は日本海ビールに出店を依頼)

金蔵のお米の前売り券 (お試し券) も売ればなおよいと思われる。

これらの点については、来年度の万燈会でアンケートを実施し、要望等を検討してさらなる方策を検討したいと考えている。

## Ⅳ) 人海戦術の限界をどう克服するか？

毎年3万個もの燈火を並べるのは、今後の運営を考えるとかなり負担が大きい (私達は 2000 個でもヘトヘトだった)、かといって人を増やすとなると人件費もばかにならない。そこで燈火の質を向上させることによって労力を減らすことができないか考えてみた。そこで、私達の活動との関わりで、金沢大学の近くにある二俣というところで作られている伝統的な和紙 (加賀二俣和紙) を使った行灯を作っている方がいるので、その方の協力を得て酒カップの燈火の代わりに、行灯を設置できないか検討・交渉しようと考えている。

## 5. その他

今年の金蔵での活動では、金蔵産コシヒカリのブランド化を目指すに当たって、成分調査や市場・販売方法の十分な調査ができなかったため、来年度はそちらの方にも力を入れたいと考えている。

また、金蔵の方々も、若い人にはどんどん金蔵に来て楽しんで欲しいと依頼されたので、プロジェクト外でも、金蔵の美しい自然を楽しむ企画を考えたい。